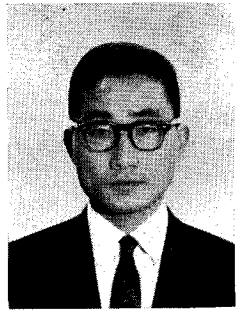


同窓会誌

1

建築学科同窓会発足一周年を迎えて



小 高 鎮 夫 (建築34年卒)

この会は工学院大学建築学科(建築・設備)、建築学専攻科及大学院建築学専攻の卒業生を正会員に、又在校生を準会員とする組織で4年制大学以後の卒業生を対象にして構成されております。しかし今後はそれ以前の先輩工手学校出身者及、学校の教職員も加入する建築学科の全体的組織へと拡充して行く事も考へられるわけです。

大学の建築学科卒業生は本年迄で第10回生となり、約2,500名の同窓生が実社会にて活躍しており、在校生2,000名を加えると実に約4,500名の方々が現在、会員となっているのです。約2年前、内外の強い要望の中で、同窓会設立の準備委員会が発足し、杉野準備委員長を中心に約1年間の努力の結果、42年1月22日に第1回総会を開催し、会は正式に発足致しました。会則も卒業生が全員会員となる事。卒業年度別に運営委員が選出される事。事業の項を具体的に列記した事等、会員のための同窓会となる様に作られました。

昨年11月には、工学院大学学園同窓会が発足致しました。これは校友会(2年間態度保留)、専修学校同窓会、高等学校同窓会、大学4学科(機械、化学、電気、建築)同窓会の7同窓会の団体会員による組織で、それは各同窓会の意見交流の場であり、共に工学院大学の発展に寄与すると云う事で、互に結び合った連合体です。ですから各々の同窓会の活動の主体性は各同窓会にあるのは当然なことです。

学園同窓会にとって重要な問題は、校友会との関係の事で昭和27年、校友会結成以来、支部活動を中心に工手学校及、大学の卒業生の親睦機関として現在迄運営されて参りましたが、卒業生の数が多くなるにつれて、今迄の会の運営方法では、会員の連絡さえ思うように出来ず更に会費未納の者は、会員とみなされないと云うような会則では同窓生の把握すら思う様に出来なくなっております。実はこの点が一番重要な問題となって来たのです。私学は、学校、学生、卒業生の三位一体により成立しているのですが、卒業生にとって、校友会は、同窓生

全員の組織となる資格を備えていないのではないかと思います。だから、大学卒業生が全員加入していかない校友会は成立当初からすでに老化現象を示めしていたのです。工手学校卒業生を中心に作り上げて来た校友会自身当初の体質を脱皮出来ず、今日に至ったのです。そこで当然の事の様に大学卒業生は卒業生全員の構成する同窓会を作り、更に全学園的なもの各同窓会を会員とする、学園同窓会が組織されたのです。そして校友会は大学以前の工手学校卒業生中心の同窓会として組織を改変し、学園同窓会の団体会員となる事になったのです。しかし実際は2年間の態度保留の希望があり、その決定は校友会の自主性にまかせられております。校友会自身、会は社団法人である事、活動は支部中心である事の二点の処理に時間と十分な検討を必要とするでしようが、全体的視野に立って解決される様願ってやみません。私達若輩にとっては校友会が主導的立場で、この様な学園全体の組織化をして頂けたら最も自然であつたろうと思うのですが、その機会は既になくなってしまったのが残念に思われます。

去年は工手学校が明治20年に時の帝国大学総長渡辺浜基氏により創立されて以来、80年を迎へての80周年記念式典が挙行されました。明治4年、工部大学(東京大学)14年、東工職工学校(東京工業大学)に次いで、工学院大学は、第一線の技術者養生のために、設置され、建築科は造家学科と称しました(早田大学は明治41年に設立)。そして一時期、中堅技術者は工手学校出身者で占められる程に隆盛を示めたのです。昭和24年、新学制の下で、先輩の御努力によって大学の設置が許可され、昭和30年、4年制の建築学科が新設されたのです。しかしそれ迄の67年の歴史があった事は私達にとって、他校に誇る財産を受け継いだ事になるのです。私達はこの歴史を大切にしなければなりません。自ずからはこの80年の歴史に身を投じ、その渦中に入り、対岸を求め、河底を凝視すべきで、いたづらに、水面に身をゆだねる怠惰

に反省をすべきであろうと思います。

建築学科同窓会は、会則の前文にある様に「健全な人間関係の確立と、意志伝達の機関」として結成されたのであります。そして会員個々の利益と、母校の発展につくすと云う、同窓会本来の姿に向って、着実に歩を進めて行きたいと思っています。幸い、毎月1回の定期運営委員会は20名前後の出席を得、順調に会を運営しており

ます。運営委員間の繋がりはそのまゝ会員同志の繋に広がるものと思います。昨年度は、名簿発刊を致しましたが本年度は雑誌発刊、そして事業業務を通じての組織充実を計りたいと思います。まだ会は創生期であります、会員諸氏の協力によってより正しい発展を期したいと思っています。

創刊号発刊にあたり

工学院大学建築学科同窓会の設立後満一年を迎えるに当たり、その機関誌建築学科同窓会誌を創刊出来ます事は、昨年7月の名簿発行と共に意義ある事と思います。

一つの組織はその体質とその変化を具象化するのに、機関誌を発行しております。別な云い方をすれば、機関誌の中にこそその組織の実体を発見出来るとも云えましょう。それだからこそ、機関誌の発行はその組織にとって自由に、かつ慎重なものでなければなりません。若輩であろうとも一個の人格と個性をそなえたものとして具象化して行くべきものだと思います。

私達建築学科同窓生は先輩、後輩の別なく又諸先生を含めて広く結びあって社会に生きて行かなければなりません。

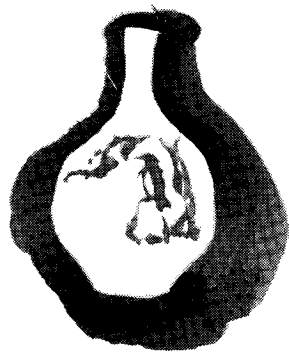
社会に出て思う事は、出身学校が同じというだけで信頼感が流れるものなのです。それを一つにまとめたものが同窓会なのです。だから同窓会誌は同窓生の技術の交流と共に精神の交流の場でもあるわけです。人間の一人の歴史の中で、30で思う事、40で思う事、50で思う事はそれぞれに必然性があるものと思います。だからその時

点で、自分を記録する事は大切な事なのです。自分を一つの形に現すのは、至難な事です、しかし、その努力をした時に、又、一つの前進が得られるに違いないのです。

同窓会誌は、今後、会員のエネルギーで満される事でしょう。

創刊号はやむを得ず限られた会員の投稿によりましたが次号からは、皆様の原稿で埋められる様願ってやみません。

(建築学科同窓会会長)



同窓会想

工学院大学学長

野口 尚 一



この度工学院大学建築学科同窓会の会報が創刊される。この記念すべき機会に所感を述べさせて頂けることは、私にとってはこの上もない喜びである。

本学は開設以来今回で19年を経て卒業回数も16回に達し初期の卒業生は既に各方面で中堅技術者として活躍している。一方において学科の数も開設当時の2学科から6学科8コースに拡大され、同窓生が年をおって増加しているのは誠に同慶の至りである。この18年間、私は私学という未経験の領域で、わが国としては切めての新しい学校制度の下で、いはば毎日を戦い続けて来た。やっとこの頃になって、われわれはどう進むべきかという道筋がおぼろ気ながら判って来たような気がしているところである。国というこれ以上ない大きな勢力を以てしても、大学を思うように発展させるのは仲々むずかしいことを考えれば、何から何まで自分の力だけに頼らなければならない私立大学、特に物資の面で負担の大きい工科系大学の運営がより一層困難なものであることは想像に難くないところと思う。それだけに学園関係の人々の意気込みが強たくたくましくなければ、この進展の激しい環境を乗切れるものではない。本学が新制度による大学として発足するに至るまでには、学園当局の間では賛否両論が相譲らず、結局は卒業生在学生の強い意向が反映されて開設に決定されたと聞いて居るが、その当時古い卒業生の多数の方々が大学成立の諸条件を充足させるため物心両面にわたり多大の犠牲を払い、文字通り東奔西走された情景は今でもなお私の目前にある思いである。それ以来歳月の経過と共に学園の状況は一応の安定を得学内外の各方面では漸くその感激が薄らぎつつあるかに見えるが、恐らく初期の卒業生諸君にはそのときの記憶が未だ残っていることと思う。このようにして私学に關する、私の第一印象は、学校当局、在学生、卒業生を一団としての堅い決意とその断行とが、私学を支へ、私学を繁栄に導く最大の要素であって、それが私学なくては見られない特色である、ということであった。このよう

な団結は事に臨んで急にできるものではなく、幸に相互に緊密な連繋があり、十分な意志の疎通があつてこそ、切めて事有るときにその実力を発揮できるものであるから、卒業生と学園との結付き如何は私学にとっては最も重要な条件であると言はなければならない。

本学園には従来から卒業生全部を包括する校友会があり、大学開設の前後には献身的な活動を以て同窓会としての責務を最高に果して来たことは前述の通りであるがその後時勢は漸く変つて来た。長い間一つの学校だけで終始し、同じ型の同窓生を以て組織された校友会がよく同窓会の任務を果して来た本学園にも、現在は性質を異にする三つの学校が併置されそれぞれその特色を持っている。しかも大学の場合には、科学技術の驚くべき急進展に伴ない各学科の間にもそれぞれの研究目的に基づく特異性を生じつつあることが認められる。このような態勢の下にあっては同窓会としての団結を最も完全に実現することができるのは、同じ専門の道を進み相互に理解が十分であるそれぞれの学科の卒業生の集団に他ならないと考えられるようになった。そのため本学では数年来、機械工学、工業化学、電気工学、建築学の各専門分野毎に同窓会を結成する気運が次第に濃厚となり、最近に至つてその実現を見た次第である。これに即応して高等学校の同窓会、専修学校の同窓会も相前後して既に発足して居り、ここに6同窓会が学園内に相並んで存在することになった。これは次第にその数を増すと共にそれぞれその性格に相違のある学園全卒業生を一挙に団結させ有効な活動を約束する有機的なつながりを与えることの困難さを解決する道であつたと考へられる。もちろん全学園の卒業生が各自ばらばらであつてよいということでは決してないので、今般この6同窓会は相集つて総合的な学園同窓会を組成し、各同窓会はそれぞれ代表者を送つてその運営に當ることになったのは喜ばしい事である。つまり学園同窓会は各同窓会の連合体であつて個人会員は存在せず、卒業生はそれぞれ所属の同窓会を通じて学

園同窓会に参加しているという構想から成立っている。このような形式を採用した理由は、各同窓会は緊密な連絡が可能な範囲を限って結成された団体として、その特色を活かした最も有効適切な活躍ができるであろうし、また学園全体に関係する共通な問題については、学園同窓会で各同窓会の代表者が各同窓会の立場で意見を述べ最も公正妥当な結論を見出すことができるであろう。という点にある。そして各同窓会が同じ専門に属する専門家の団体として、また同門の卒業生の連絡機関として、存分に活躍できると同時に、学園同窓会を通じて卒業生の意向は常に学園の方針、学園の動きに反映され、われわれが希望し期待するような、よい連繋、堅い団結が実現されるに相違ないと信じている。

われわれが常に念願するところは、80年の伝統ある工

学院大学学園が時代の要求に対応しつつ健かに成長して行くことであって、学園当局がこの目的に向って全力を傾注するのはもちろんのことであるが、それを或いは鞭撻し、或いは支援するのは卒業生諸君の母校を愛する熱意に他ならない。私はこの点に関する卒業生諸君の理解と協力に心から信頼と期待を寄せている。

建築学科同窓会は大学の4同窓会の中では一番若い同窓会である。それだけに他の同窓会が経験してきたところを十分に検討してあると考へられので、今後の活躍に対してはより一層の合理性と大きな効果を想定しても誤りではないと思う。一方において連合体のある同窓会、全体の中の個でもあるという点を十分に考慮に入れながら、特色のある発展を遠慮なく進めて行って頂きたい。

創刊号によせて

工学院大学学園同窓会会長 山 根 茂

このたび建築学科同窓会が設立せられ、いまその会報第1号の発刊をみることは、まことに喜ばしいことでありまして、会員の諸君とともに、心からお喜び申し上げます。

大学関係では十数年前に応化会が設立され、数年前に機械工学同窓会が、また昨年には、電気同窓会並に建築学科同窓会が相次で設立されまして、これで各科の同窓会がそろったことになるわけであります。又他方専修学校が数年前に同窓会をもち、昨年末には高等学校同窓会が設立されました。これらの同窓会は、それぞれ独自の活動をするわけではありますが、同じ学園内にある、これらの同窓会が、なんらの連絡もなく、ばらばらの状態にあることは、決して、このましいことではないので、相互の連絡を密にし又互に親睦を深めることを主な目的とした、連合体をつくろうという気運がもりあがり、先般工学院大学学園同窓会が設立されましたことは、皆様も御承知のことと存じます。従って、建築学科同窓会も、その有力な一員として、ご協力を願うことになったわけがあります。

ひるがえって考えてみますと、学園同窓会の傘下に、

このように各同窓会があるということは、ずっと以前、わが学園に、まだ大学あるいは高等学校が設置されていない時代にも、同窓会（現在の校友会）のほかには、たとえば、応用化学科卒業生からなる応化会、あるいは建築科卒業生からなる建友会といったように、各科卒業生が、それぞれ別々に卒業生の団体をもっていたのと、同じ状態であります。即ち、専門を同じくした出身者が、互に技術の交流をはかり又親睦を深める必要があったからであります。従って現在のように、教育程度の異なった三校が設置されている場合には、なおさら、前に記したような気運がもりあがるのは、当然なことと存じます。

建築学科同窓会は、設立されてから、まだ日があさいので、将来いろいろな点で困難なことも起こるかと思存しますが、これらに、皆様が、この同窓会が自分達の会であるということを、十分認識していただくならば、いかなる障害も克服できると信じます。皆様のご協力によって、皆様のこの会がいよいよ発展いたしますよう祈念するとともに、学園同窓会に対しまして、一段と御支援下さいますようお願いする次第であります。

(工業化学科教授)

工学院大学同窓会発足にあたって

建築学科主任教授 波多江 健 郎

前々からの懸案であった工学院大学建築学科としての同窓会がここに発足した事は、心から喜ばしい事である。

建築学会の名簿をくってみると各頁に必ず1人、或は2人、3人と卒業生の名前がみられる。大学になってから僅か10有余年の間に数においては勿論であるが、各方面で活躍している卒業生も亦非常に多い。この頃ではカナダ、アメリカ等の建築事務所との、大学院に留学している若い卒業生等から元気な便りを受ける。確かに卒業生の増える事は嬉しいには違いないが、それと同時に我々と卒業生との断絶感が増々はげしくなっていくのはどうし様もない事なのであろうか。その根源は大学に於いて現在行なわれている建築教育自体の中にあるのかも知れないし、亦大量教育という我国、私立大学の教育風土もその因の一つになっているに違いない。

然しその様な環境の中から、心ある卒業生が中心となって、同窓会を発足させた事は私達教師にとっても、学生にとっても非常に意味のある事だと思う。

我々の大学が未だ新しい様に私達の教育に対する考え方も新しい、世に数多くある唯々名目上の会としてではなく、新しい同窓会のあり方としてお互に考えようではないか。アメリカの大学に於ける卒業生と学校とが一体となって、あらゆる意味で学校全体をレベルアップするシステムがとられているが、全く同じシステムとまでは行かないが、この様なシステムを参考として実社会にある同窓会諸氏からの教育に対するアドバイスなり、或は亦兄として若い学生諸君を外から正しい方向へ育てていってもらいたい。

ここに工学院大学同窓会の意義があると思われるからである。

会誌発刊によせて

建築設備工学コース担当教授 吉 田 辰 夫

建築学科同窓会誌が、発刊されることに成ったことは、同窓会の大きな進歩であります。同窓会の会員間に緊密な連絡が行なわれないと、会は発展しないと思います。そこで、連絡の役割りを果たす、会誌の存在は会発展の基本条件である。この度の会誌発刊によって、同窓会が一人前の姿を整えることになると同時に、会発展のため、誠に慶賀の至りであります。

さて、会誌を今後どのようにして充実して行くかが、問題となります。先づ会員各位が、これを盛り立てる自覚が必要でありましょう。誰かがやってくれるであろうというのでは、会誌の充実は望めない、これから多数の会員が、ふるって投稿するように努力する必要があると思う。次に同窓会の会員連絡の方法につき、年一回の学祭を利用して集まる方法も有効ではなからうか、会員がもっと、学祭日を覚えておいて貰いたいと思う。

しかし、社会に活躍している会員が、忙がしい月末に集まることはなかなか困難な面も多いであろう。私の経験からしても卒業当切は別として、同窓生の集りはなか

なと思うようにゆかないもので、やはり、強力な魅力のある呼び掛けが必要であります。

会員のまとまりがその手っ取り早いのは、既に、行なわれていると思うが、同じ研究室に居た者同志の集りがあるので、この中から、卒業年度毎に、有力常任幹事を決めておくことを考え、この様な小グループを統合するのは、同窓会本部の仕事であり、また、会誌も重要な役割を果たしてくれると思います。

私の研究室に居た卒業生から、年賀状や、暑中見舞などを沢山頂いておりながら、いつも貰い放しで、誠に申し訳ないと思っております。この夏、思い付きで、近況問合せということで、研究室に居た殆んど全員に、暑中見舞を送りました。恐縮した返事を、貰った方もあるが、皆健在で、社会の第一線に、活躍していることを知って嬉しかった。同窓会のためという訳ではなかったが、結果としては、同窓会のために多少はお役に立っただろうと思っております。

建築学科同窓会の発足にあたって

建築学科教授 正 木 三 省

うちの大学の建築学科も、短大設置以来では15年余、学部ができてから12年余になり、この間にはかなり多数の卒業生を世に送り出してきました。

建築学科同窓会の会誌創刊号の発刊にあたって、下元先生とともに私が最古参ということで、思い出話でも書くようにとの依頼がありました。

今までの建築学科の歴史をたどってみると、昭和27年に短大に建築科を設置、30年に学部建築学科を設置、31年に短大を廃止、33年に工学専攻科を設置、36年に設備工学コースを設置、9階建新館が落成、38年に八王子校舎を開設、39年に大学院修士課程を設置、41年には博士課程を設置、同年から1部の1、2年生は全員八王子で授業というようなことになります。

大学というものは規模が大きくなることだけを望むべきではないでしょうが、とにかくこの十数年の間には、建築学科としても大学としても規模が驚くほど大きくなりました。短大建築科ができたころは、建築科の教職員は4人で事務員はなしだったのが、今では科の教職員だけで40人ちかくなっています。

学生数も、極端な例では学部第1回生の十人に満たないという例もありましたが、設備工学コースができたころからは一段とふえました。

教育・研究設備も、設置のころに比べるとめざましく充実しました。校舎が増築されただけでなく、図書もふえ、実験や研究の設備も現状でじゅう分とはいえないまでもぐっと充実してきました。暖房設備にしても、火鉢から石炭、スチームへと変わってきて、炭火を下敷であおったりしていたのも、一むかし前のことになってしまいました。

さて、それではかんじんな学生の学力などの点はどうかということになりましょう。設置当初は学年十名をわたったという記録もあるくらいですから、自然に、入学を志願する者はあまりこばまず主義になり、競争率にかかわらず優秀な人もいた反面では、なかなかのさむらいも散見しました。

それが技術振興の時代の波に恵まれたせいもあって、入学者の学力最低線はめきめき上昇し始めました。八王子校舎開設のころは地理的に不便になったせいか、一部の方は入試競争率や合格最低線の上昇がちょっとにぶつ

たこともありましたが、このところはベビーブームの余波もあって、まあ安定成長というようなかたちといえましょう。

大学での教育も、当初は教員では私が最年長で、みんながいやがる測量学を担当させられたりして、学生諸君の迷惑はもちろん、私自身もその講義の予習にはひどいめにあったりしましたが、その後は続々と若い先生もふえて、今では私などもしゅうのような存在になってきました。

設立のころの学生は学校側のいろいろな不備にもかかわらず、世間に出ては一人前以上になんとかするのが通例という説もあるようですが、うちの卒業生もほとんどはこのように説にあてはまるようで、就職先などでの評判もだいたいよく、大器晩成型も多かったようです。

しかし、そのように諸君の母校が発展してきたことはご同慶のいたりです。

学校は学生をよりよく教育して世に送ることが第一の使命であるはずなので、私なども判定会議などでのけが人の弁護もほどほどにして、学校の発展に努めるべきだと思います。

同窓生の諸君も、同じ学校に学んだことを縁として、たがいに親しみたすけあうことにこの同窓会が役だつようになることを期待し、同窓生の成長と繁栄は母校の発展につながるものと信じています。



同窓会への希望

建築学科教授 横田 道夫

建築学科の同窓会が結成され、その発展の第一歩が踏み出されんとしている事は私にとって誠に嬉しい事である。

私は東京工業大学の第一回生であり、又教師としても新京工大、都立工専(現都立大)、北海道大学と、いつも建築学科の創設時に勤務した関係で、同窓会の必要性は万人の認める所であるにかかわらず、その発展に対して幾多の困難な問題に遭遇する事を知っている。それだけに余計に私は今回の新発足を心嬉しく思う次第である。

今後同窓会はどうある可きかは、会員諸君が自ら独自の方針を立てられる事であろうから私は何もそれについ

ての希望はないが、只一つ会員の皆さんに是非守って戴き度い事だけを記したい。

1) 同窓会の名簿の完成は、最重要事と思われるのでその完成に卒業生会員の協力を望みたい。

2) 又自己の住所、勤務先の変った時はまず、ただちに会の本部に連絡する事。出来れば職場の同窓の状況報告も併せて(之は建築関係は常に現場が変わるので、仲々面倒な事であるが)以上の事は平凡で、つまらない様な事であるが、この事が守られないと、いくら高い理想を掲げて、それは絵に画いた餅となる事である。高い理想は卑近な簡単な事から築いてもらいたい。

同窓会員諸君へのお願い

建築学科教授 保岡 豊

現在私は教職員組合の副委員長になっているので頭にかぶことは委員の仕事は相当なものであるということである。先づ同窓会の委員に感謝し敬意を表する。委員は各年度から出て諸君のためにつくしている。委員がつくせばつくす程同窓会は発展するもので諸君は委員に進んでなって頂きたい。人に委員をおしつけてのうのうしていることは許されない。面倒なことは公平に分担することが民主的な原則であろう。一あたりまわるまでは重任する必要はないと思う。中には委員に向かないと思われる人もあろうが誰でも誠意をもってベストをつくしてやりさえすれば誰だってできるものであり、その時々の特徴があらわれて面白味が出てくるものである。委員の回り持ちが各自に同窓会に関心をもち、各自が関心をもつことが即ち同窓会を発展させることに外ならない。

同じく建築の技術家をめざして、同じ学窓に学んだ諸君が国内の何れかの地においてまた国外において、世の中のためそれぞれの分野に活躍している。お互にその活躍の状態を一人一人スイッチの切り換えてまのあたり見ることができたら如何に楽しいものかと空想する。この

空想まではいかないがその目的で存在するのが我が同窓会でお互の活躍を知りあって或は喜び合い或ははげまし合うことができることになったのは幸福である。

電話は加入者が増えれば増える程その価値を増すものであるが、これと同様に同窓会に集る人が多ければ多い程同窓会が楽しいものになり意味深いものになるのであるから、同窓会にはできるだけお互のために集って頂きたいものである。

諸君は母校の名誉をになって働いている。各方面で活躍している諸君の評判がよければよい程優秀な高校の卒業生が工学院大学を志望して集る。私は学校の興廃は一にかかってとはいわないがかなりの比重が卒業生の活躍状態にかかっていると思う。是非この事をお考え願いたい。所謂循環作用でよければ益々よくなり悪ければ益々悪くなるもので、願くは諸君一人一人がベストをつくしてやって頂きたい。

大学は数々益々ふえて行く。当然の結果として大学卒業生は益々ふえて昔のように大学卒というレッテルだけでは通用しなくなっている。人にはその人の天分があり

ただベストをつくせばよいのである。諸君がベストをつくせば、いい学生が母校に集る。その集った学生を我々がベストをつくしていい卒業生として諸君の仲間に送り出す。

願くは諸君ベストをつくして活躍して頂きたい。ベストをつくす原動力は健康である。諸君十分に健康に注意されることを祈って止まない。

山の重さが私を攻め囲んだ
私は大地のそそり立つ力をこころに握りしめて
山に向った
山はみじろぎもしない
山は四方から森厳な静寂をこんこんと噴き出した

高村光太郎「道程」より

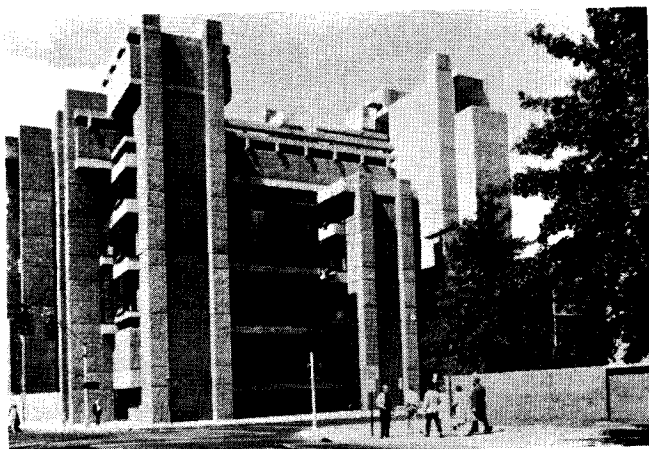


ポール・ルドルフの横顔

工学院大学講師 山下 司

私がポール・ルドルフに最初に逢ったのは、1960年の春、東京で開催された世界デザイン会議に出席のため来日中の時であった。当時日本では混乱した都市に対する再開発の確固とした Vision がなく、メタポリズムと云うキャッチフレーズのもとに、ユートピア的な空想都市計画によって、建築家の自己満足的な提案で大衆を啓蒙しようと考えていた。会議での日本建築家達の主要テーマは、メタポリズム、即ち、都市は生物の新陳代謝と同じように、常に古いものから新しいものへ交換出来る可能な次元で考えるべきものである。と云うことであった。このテーマのもとに計画されたいくつかの project に対し、会場でのルドルフのこれらに対する批評は、一言のもとに “It is no meaning”. であった。紺の夏服をスマートに着こなした彼は、アメリカ建築界の青年将校と云う感じがした。物おじしない直裁なこの批評に私は好感を持つと同時に、意志の強さを感じた。その後彼は、工学院大学で彼の作品のスライドを見せながら、彼の建築哲学について講演をやった。正直に云って、彼のそれ迄発表されたいくつかの住宅から得た私の彼の作品に対する評価は、あまり好ましいものではなかった。しかしこの講演を聞いて、彼の作品に対する考えを改めた。その夜、食事をするため、彼の泊っていた日本での最高の室内空間を持つ帝国ホテルに彼を迎えに行った。ロビーでの彼は、まづ最初にその空間の質の高さをほめ、そしてその空間の流動、構成、比例、自然光の効果について明確に分析した。レストランでの彼にとって、ハシを使うことは丁定規を使うのよりはるかに難しいように見えた。ウェイトレスの助けもあり効果なく、むしろ迷惑そうに感じられた。そこでアメリカの建築界について色々話し、その中でサリーネンに関して、“彼はセールスマンだ”，と云った。これは後で Yale の学生より聞いたことだが、皮肉にもルドルフ自身が最近忙しく

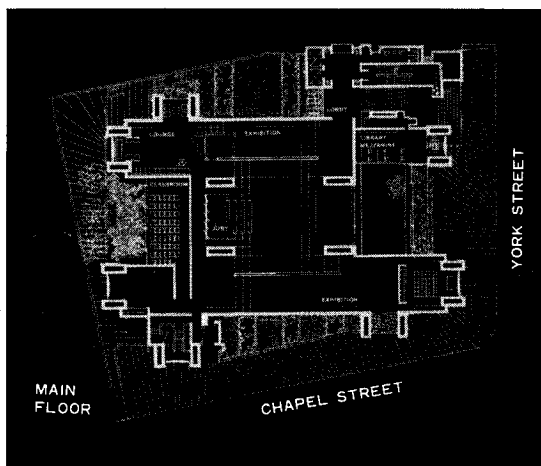
“まるでセールスマン見たいだ、と云われている”。と聞いた。この食事の席で私は彼の元で学ぶことをすすめられた。それから4年後の1964年9月、やっと渡米のチャンスがやって来た。私は Yale 大学のある NEW HAVEN に着くと直ちに Chapel St. に出た。彼の代



Art & Architecture Building, Yale University. /1963

表作である 建築学部校舎 (A&A) を見るためでありこの建物を見ることによって、彼の建築に対する考え方、アプローチ、方法論が学べると思ったからである。Chapel St. から見るこの建築のコーナーは、他の多くの Yale campus のタワーがそうであるように、一つの重要な焦点として私に語りかけた。Bingham Hall. Art Gallery. Karn の New Art Gallery と続く一連の動きを彼の A&A のコーナータワーが強く受けとめ、建物に近づくにつれて、A&A は次第に大きく横に広がり、屋上パラペットのリズムがそれを強調し、そしてもう一つのコーナーにつながり、campus へのゲート、コーナーサイドの建物としての動きを十分に果していた。この建物に対する彼のデザインアイディアは、建築及び芸術の教育にふさわしい創造的な環境を、Active に創りだし、その形が都市に対していかに語りかけるべきかと云

う。建物と人間との間に雄弁な communication を成立させようとの試みから出て来たように思われ、それが充分に成功していると思われる。

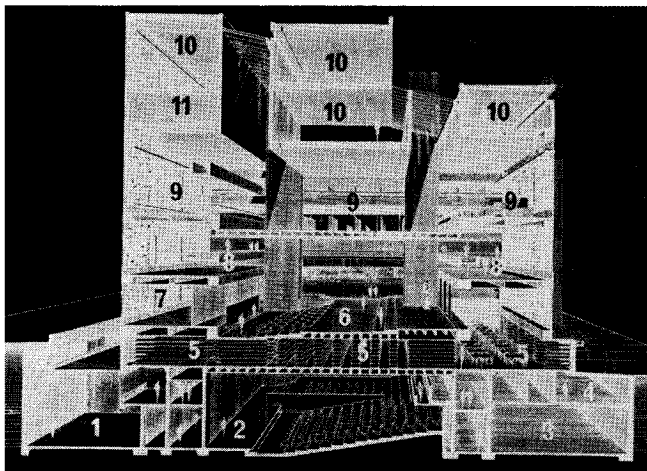


A & A. Building, Main Floor Plan.

実際私は、ルドルフが創ろうとしたものと同じかどうか知らないが Main FL. の入口, Exhibition Space, Student Lounge からこの階の支配的空間である Jury Space への空間の集中的な動きと、さらにここから中 2 階の Office 階及び階下の図書館へとつながる Space の動きを充分に感じることが出来た。特に 4 階の製図室に於いては、その動きは更らにダイナミックであり、この space は建築を学ぶ学生にとって、最も重要な創造的な雰囲気を作り出し、一年の短い間であったが、私は充分にこの空間を楽しみ、かつ学んだ。そしてこの space は私にとって生涯忘れることの出来ない space でもある。そこには Human な空間を創造すると云う一つの大きなテーマの下に、強い order があり、単純な system が、ディテールから構造、space そしてマスの combination 迄つらぬかれ、この order を支えている。その system とは、長方形の積み木を面と面で重ねたようなものであり、これが次に充分駆使されている。私は、この建物にライトの建築のもつ Human な space を感ずると同時に、コルブの建築の持つダイナミックな迫力を感じた。この迫力こそ、建物及び都市が持つべき人間に対する communication であろうし、かつて中世の都市の素晴らしきもここに起因するのではあるま

いか。私は Yale で学んだ一年間、毎朝の登校時にこの建物との精神的対話を楽しんだ。

私の二度目の彼との出逢は教師と学生と云う立場であり、その場所は彼の設計した A & A Drafting Room であった。これは教師にとっても学生にとっても、まったく理想的な状態であり、創造の場と云う緊張感があふれていた。二度目に見る彼は、4 年前の青年将校と云う感じより、堂々たるアメリカのリーダー的建築家である様にみえた。教師としての彼は、厳格そのものであってクラスに於いてはめったに笑はないが、笑えば亲切歯が出て、愛想のいい感じさえ人々に与える。全ての学生にとって、彼の criticism は絶対であり、彼の顔色を見て学生は一喜一憂したものである。実際、Master's class には 5 年〜10 年の経験を持った建築家が数人居たが、彼等の図面に対するルドルフの読解力は実に早く適確であり、彼等自身よりはるかに深く読んでいた。彼の criticism は実にきびしいものであり、数人の学生の顔色を青ざめさせる程であった。ある時、学生の作品に対し structural Expressionism をいましめ、「私は16年前、カテナリーの住宅を設計したが、カテナリーの構法は、もっとそれにふさわしい規模のものに使用すべきだ。まだ若い私は、たった 22ft の span にカテナリー*を使ってしまった。もっと大きいものでそれを試みるまで待て

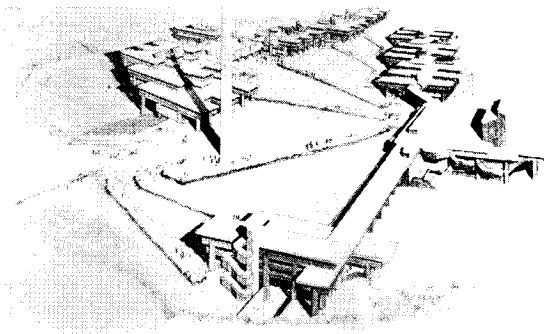


A & A. Building, Section.

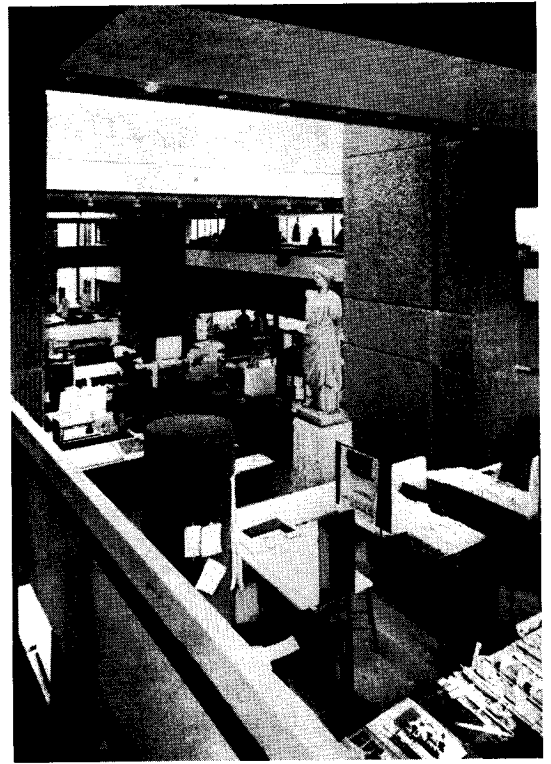
- | | |
|---------------------------|----------------------|
| 1. SCULPTURE STUDIO | 7. CLASSROOM |
| 2. LECTURE HALL | 8. FACULTY OFFICES |
| 3. MECHANICAL | 9. DRAFTING ROOM |
| 4. DARKROOMS | 10. PAINTING STUDIOS |
| 5. LIBRARY | 11. STORAGE |
| 6. MAIN HALL & "JURY PIT" | |

なかったからだ。」と学生を笑わせた。

私は Yale を卒業後更らに彼の彼の建築に対する方法論を学ぶために、彼の office に応募し、運よく彼の下で働くことが出来た。office での彼は、全く天皇みたいてあり、全てのデザインが彼の手によってチェックされる。彼は常に忙しく、歩くことを知らない。いつも広くもない office で図面の間を走っているように感じられる。協同設計の何たるかをよく知っている彼は、所員の意見をあまり重視しない。ある日、一人の所員に対し “I am never ever interested in a excuse.” と云ったことがあった。実際、Design の出来、不出来がその日の彼の気嫌を決定する。幸福な時の彼は口笛を吹きながら、実に楽しそうに、スケッチをやったり、皮のクッションの上で昼寝をしているかと思うと、突然起き上り、製図板の上でスケッチを始める。不気嫌な時の office は非常に静かである。私がいた時、彼の office では、ボストンガヴァメントセンター、シラキュース市庁舎、コルゲート大学アートセンター、南マサチューセッツ工科大学、ロードアイランドのアパート等の仕事が進められていた。これらの建物のどれもが、それぞれの時代の代表的な建物になり得るものであると思われる。これだけの仕事をかかえているのに office の所員はたった 15 人であった。したがって彼の忙しさは大変なもので、週初めと週末の数日だけ office に居て、他はボストンやシラキュースに行き、彼にとって土曜とか日曜は全くなく、飛行機とか、汽車とか、会議場のテーブルがたびたび彼の Design の場所になり、それらの場所でやったスケッチが所員の手で図面化され、それを更らにルドルフがチェックすると云う様なことがくり返えられる。建築は彼にとって全てであり、その他に趣味は全くな



South-Eastern Massachusetts Technological Institute (SMTI)/1964



A & A Building, Drafting room.

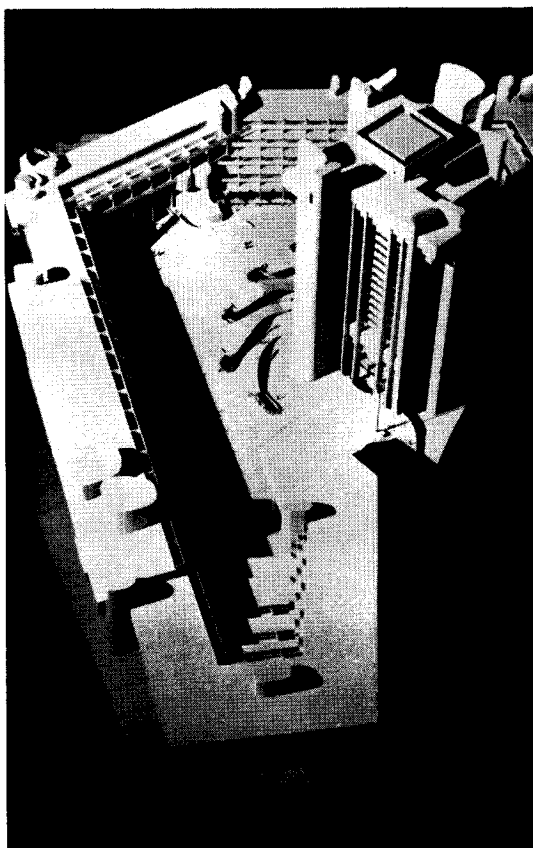
い。タバコも吸わないし、酒もあまり多くは飲まない。スポーツもあまり彼の興味を引かないようである。彼の office での presentation drawing はすべて彼のチェックの下に行なわれ、その Drawing については仲々ウルサイ。彼は巨大な図面が好きで、長さ 20ft 位の図面が数多くある。彼の staff は皆、非常にいいパーソナリティであり、私は非常に楽しい事務所生活を送ることが出来た。

彼の現在もっとも力を入れている建物は、ボストンガヴァメントセンターであろう。何故なら、彼は現在、都市に於いて建物の役割は如何にあるべきか？と云うことに対して強い意見を持ち、この建物が、それに対する解答だからである。彼は都市の core になる建築をいくつかあげているが、公共建築はその一つである。この敷地はボストン再開発計画の中心をなす地域であり、現在、工事中新市庁舎につづいている。この計画の main concept は都市の core としての public building は如何にあるべきか monumental

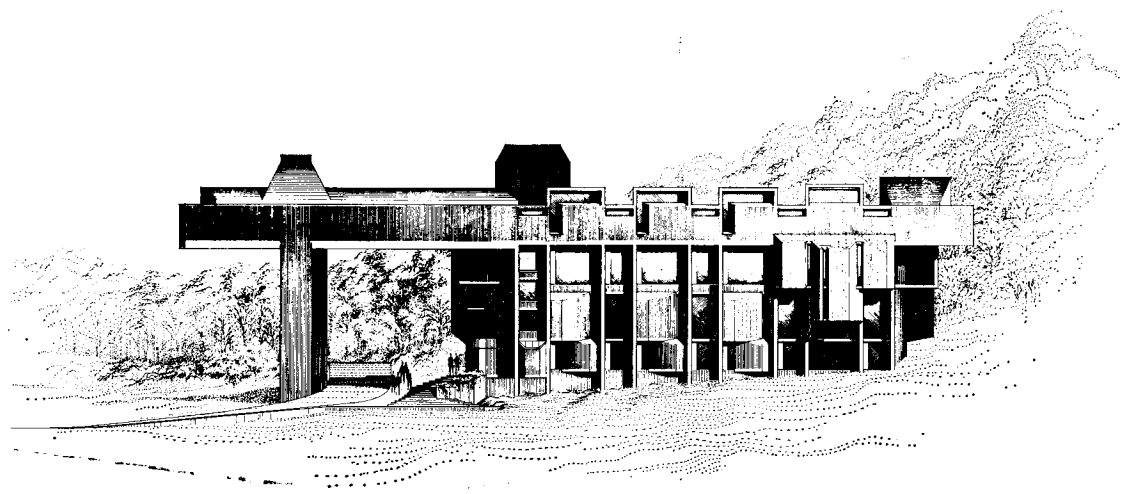
な性格を持つべき都市の core となる建築に、いかにして Human Scale を持つ space と form を与えるかという点である。

彼は米国に於けるリーダー的建築家であると共に、最も out spoken critics の一人であり、きびしい建築教育家であり、1956年、A・R に発表した、six determine of Architectural Form. をはじめ、数多くの論文を発表している建築思想家でもある。そして、非常にセンスのいいユーモアの持ち主でもある。ライトなき後のアメリカ建築界において、彼の存在は非常に大きいと云わねばなるまい。

〔註〕 * 吊屋根の週末住宅/1950



Boston Government Service Center/1964



Creative Art Center/1964

先生・親馬鹿の巻

武 藤 章

明日、私の長男は五歳になる。最初の子供の成長の歴史はそのまま一家の歴史でもあるので、長男がはや五歳になるということが妙に私を感動させる。

親の欲目といわれるかも知れないが、私の長男は大変いい子である。元気で病気がしい病氣もしたことはないし、適当に我が儘で適当に素直で、情に篤く時々大人をはろりとさせる。意地悪でも欲深かでもない。だが大変な遊び好きで、お隣の小学校一年生の坊やと1日きゃあきゃあいって遊んでいる。絵本なんていうのは嫌いでテレビのウルトラマンだの遊星仮面だのにうつつを抜かしている。幼稚園の同じクラスの子の何人かは字が書けるそうだが、彼はひらかなを読むのがやっとなのである。時折り家内がやっきになって教えたりするが、あまりのってこない。その代り、テレビから得た知識の量は大変なものである。時々、大人の使う言葉をうまくタイムリーに使って親をぎくりとさせたりする。そしてエレキが聞こえればモンキーダンスの真似をしたりする。

こんな子供を現代っ子だといって目くじらをたてる大人がいるが、当の父親の私はのん気ものでちっとも心配をしていない。むしろ吸収力のすさまじさに感心しているのである。大体、すべての能力が平均して伸びていく成長などというものはあり得ない。自然はもっと自由で奔放なものである。ある時期にはある部分が大きくなり

次には別のところが急速に発達したりする。そして健康な生命のある限り最後にはあるバランスをもってまとまるものである。そう考えると、五歳の誕生日を迎える長男が六歳になる時にはどう変っているかが大変楽しみとなってくる。教師として、私は元来教育というものはある時期での知識のバランス、あるいは能力のバランスの典型を押しつけるものではないと信じている。伸びるところをどんどん伸ばし、伸びる力を刺激するのが教育であるというのが私の信条だ。そのためには適宜なコミュニケーション、つまり心のふれ合いが必要である。

私の長男の場合にも、その心のふれ合いだけは親の務めとし保っていきたいと思う。そのためには明日の誕生日には何かいいものをプレゼントしてやりたい……なんて考えるのはやっぱり親馬鹿か。 昭 42. 9. 20 記

(建築学科助教授)

電気設備工事 設計・施行・監理

日 昭 電 気 株 式 会 社

取締役社長 池 田 栄 一

本 社 東京都港区北青山2丁目7番10号
電 話 (402) 7 1 5 1 ~ 5

営 業 所 仙 台・大 阪・松 本・富 士

「帝国ホテル取り毀し」に思う

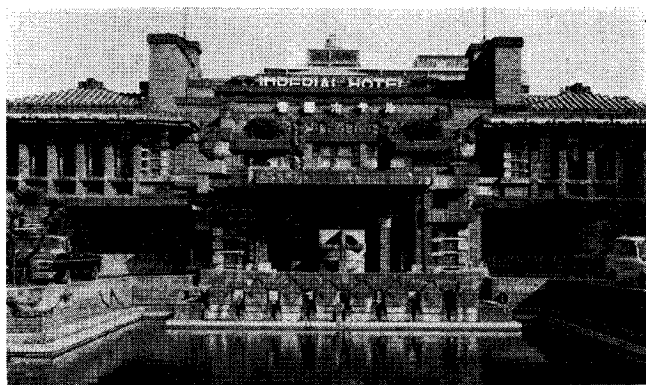
小 高 鎮 夫 (建築 34年卒)

帝国ホテルは、近代ホテルの機能を満足に果たしていないという事で一部を明治村に移築し、その他は取り毀しに決定した。一言で云えば、想像していなかった出来事だけに非常に残念な事だと思う。そして又、ライトを学んだ私達にとっては、悲しい出来事でもある。更に忘れてならない事は、この様な行為を正当化させる時代と社会的背景であって、この事実を直視し、同じ過ちを再び繰返さない様努力して行くべきであろう。

帝国ホテルは、関東大震災(1923年)にも生き抜いた点、卓越した構造と、当時の日本のスケールに合わせた、

々の流動せる空間を同時的に発展、融和させ、更にキャンティレバーの構造原理をも加へた、彼の云う、有機的建築への真のスタートがここに始まったからである。続いて30年後期、カウフマン邸(落水荘)、ジョンソンワックス会社の事務所の完成となった。

今一つ帝国ホテルの日本での存在価値は、彼の数少ない外国での作品の一つとなっている。カナダに二つの住宅、日本には他に自由学園、芦屋の別荘とあるが、勿論他に比する事の出来ぬものであり、大正時代の記念的建築物である。



原始アメリカ建築のマヤに根源を求める非日本的造形の建物である。そこに流れる空間は訪れる誰に対しても、個人の存在を認識させ、途絶された世界の中での時間の瞬時の停止に心の安ぎを感じさせるのである。光と影の世界は、建築において初めて可能な三次元の世界であるが、その対立と調和の中で、この建物は私達に精神的に何かを与えていた(これは個人的なものであるが)。私にとってそれは、桂離宮で受ける非体験的人間性の知覚でなく、土間と囲炉と大黒柱のある農村の民家で受ける体験的人間性の知覚である。そして建築を装飾する事は住むための内部空間に必要なものなのである。

又一方、この建物は、フランク・ロイド・ライト(1867～1958)の作品の中でも、前期から後期への一転機を見せる歴史的傑作であると言う。それは、水平と垂直の各

商業建築にとって第一に必要な事は、利潤の追求にある。限ぎられた面積の中で有効な利益を得るためには容積があればある程良い、ホテルとしてみれば、室数が多ければ多い程良いと云う事になる。平面的に構成されたものより、立体的に高く延びた建物の方が、経営者にとって好ましい事は当然であり、今回の計画でも、地下3階、地上26階、高さ111.5mと云う。空地地域から容積地域への適用は、この建替に一つの機会を作ったに違いない。それと又、電気、衛生、空調の設備も、現在、ぎりぎりの限度まで来ていた事も率直に認めなければならないだろう。だがそれだけの理由で、価値ある建物が、自由に一個人の意志で破壊されて良いものであろうか。

土地私有制度によって始まった資本主義的理念は終局

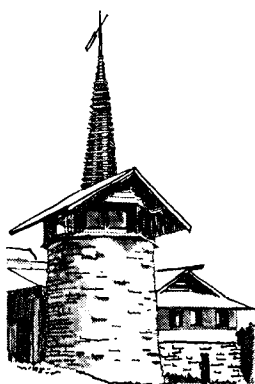
個人偏重主義となって現在を謳歌している。そこでは知らぬ内に個人は、歴史も、文化も、遺産も意のままに出来ると云う錯覚に陥り、社会も又それを認めると云う反民主主義的傾向をもたらし来た。そして、偉大な過去も歴史の1断面に過ぎない現在の満足のために抹殺しようとする。それは恐ろしい事だ。音楽の心を知らぬ者は、音は耳で聴くものだと思います。絵の心を知らぬ者は、色は目で見るものだと思う。無知なものによってその真実な心を理解されず、破壊されるのは不幸な出来事である。——帝国ホテルの場合にもこれは云えると思う。ロビーの一部閉鎖、新設されていた仮設の食堂の造り、(テーブルも、椅子も、食器も、灰皿も)それよりも、ホテル内にある小劇場や、大食堂の演奏バルコニーは、市民のためのものと願った施設ではなかったのだろうか。設計者の心と使用者の心との差は、不調和と断層の繰返しとなって現われたのである——。

今日物質文明が精神文明を凌駕している点は万人認める所だろうが、それだからこそ、良識ある文化人や学者の言は傾聴すべきであって、残すに価値あるとした遺産は残すべきであり、その時代に生きた私達の義務でもある。その時代に失なった遺産はその時代に再建しなければ再びこの世に生れないといった。祖先の人達の義務と

責任感によって、世界に誇る日本の歴史的建造物が残されている事を忘れてはならない。

戦後の経済復興は、朝鮮動乱を機に急速に発展し、現在、世界最高の成長率を誇っている、政治不在と云われる日本の中であって、財界の占る役割は大きい。けれども一個の商業建築ではいまだかつてない程世界の世論を生み、日本の建築家の一致した行動も、処詮他の世界の出来事と見ていた今回の態度には、割切れない多くのものを感ずる。商業ペースにのらぬものには手を出さぬと云う態度、同じ仲間同志の平和は守ろうとする仲間意識。都・国の最高責任者の声明及指示も、犬丸社長には既定方針を全面的に中止させる力はなかった事。運動の最中建築工事確認申請が許可された事等は日本の国の現在の姿をまざまざと反映しているのではないだろうか。又大切な事は、この問題が国有地の上で起った事であるが、借地権一つを盾に問題解決への努力を否定出来る現実である。しかしそうであればある程私達はその時代の流れに左右される事なく本当のものを引きわめる力を養うべきである。帝国ホテルは失ってもライトを学んだ者達にライトの心を伝えて行こうではないか。

(白石建設勤務)



ライトの言葉

砂漠では平らな固い壁はふさわしくない。そこでは、あらゆるものが風と水によって彫刻されるからだ。岩もトカゲも、サボテンも、あらゆるものが模様をつけられ生地をあたえられる。砂漠の土地が彫刻されるから、その建物の形も気高く単純でなければならない。そしてそのように光りと戯れ、砂漠の生物と調和する直線的な形の秘密を、サボテンに学ばなければならなかった。こうして、人間のつくった建築と自然のつくった風物とが、互いに美しさを高め合うこととなった。

趣味

私と囲碁

久保 保 (建築30年卒)

私が初めて碁石をにぎったのが何時であったのかははっきりとした記憶がないのですが多分5歳の頃ではなかったかと思います。

私の生れた所は東北の郡山市という町で、父は書画骨董古着の競市を開いておりましたので、私の家にはいつも同業者の幾人かが来て屯しておりました。そこでは花札や将棋をしたり、碁盤を囲んでパチリパチリとやっていたので、それらを見ているうちに私もいつの間にか碁石を握る様になり小学校に入学する頃には父の商売仲間の暇つぶしの相手ぐらいは出来る様になってはいました、(多分その頃は12級ぐらいではなかったかと思っています)。以後私と碁とのつながりは二十何年になりますが、その間いつもしっかりと結びついていては無く幾度かたち切れられ、又自分の方から離れそうになったりすることがありました。

私が小学校に入学する頃、太平洋戦争もようやく日本の敗戦の色を見せて、3年生になった4月には、私の町にもB29爆撃機が120機の編隊でその不気味な姿を見せ、工場地帯や、駅舎にも大量の爆弾を落して行きました。そしてその頃を境として私と碁のつながりも、工場の煙突達のように、こっぴみじんにくだかれてしまいました。その時私に対する父からの碁禁止の理由はたしか国民が一丸となって敵米英に立ちむかわねばならぬ、たとえ子供であっても碁なぞやって遊んでいてはいけないうことだと記憶しています。

終戦を迎え、張り詰っていた気持の緩みと、悪い栄養状態の中で次々と家族が病気になる、やがてその時期も過ぎて家の中に一応の落ち着きをとるもどした(私が小学校の6年生になった)頃、忘れられて床の間の隅にホコリをかぶっていた碁盤に雑布がかかり、家の中に又パチリパチリの音がひびく様になりました。その頃の私の囲碁人口は父—4級、長男—7級—一次男—10級、3男—8級—一次女—12級、4男—(私)—8級の6人おり、ひと月毎に表を作ってはリーグ戦を行っていました。そして1ヶ月の成績でたがいの手合を調整するという具合でした。そうこうするうちに私も中学3年になり、初めて大勢の中で碁を打つ機会に恵まれました。

それは夏休みになって帰省した長男につれられて出た郡山市民囲碁大会でした。市の中央部にある如法寺とい

う大きな寺で行われたその会は始めてである私にとってはまったく晴れがましいものでした。A・B・Cの3つのクラスに分けられ私が出たクラスはB級(1級〜6級)でしたが運よく入賞することが出来ました。しかしその事が却って私と碁との2度目の決別をもたらすはめになってしまいました。というのは大会以後調子に乗って毎日毎日碁にはげみすぎて、ついに又もや父から禁止を言い渡されてしまいました。それ以後高校卒業迄は石をにぎる事もなく、兄貴達が東京、北海道と離れてしまった事もあり、全く碁とは無縁の様な状態が続きました。しかし、大学受験に上京し、失敗を重ねた3年間を私の友として支えてくれたのは碁でした。もっともこの3年間で4級から2級の棋力迄に上ったことを考えると、碁が私の受験失敗の一因になっていたのではないかとも思われますが、とにかく飯代を節約しても碁会所通いをした頃でもありました。大学入学とともに私の碁会所通いもたまにのみになり、2年生が終りになる頃には、雀友と共にマージャンが日課となり、半年程してそれがパチンコに変わり、そしてビリヤードへと移ってゆきました。その頃は私と碁とのデートも一月に度あるかなしきの細々としたものでした。しかし、浮気は所詮浮気でしかなく、4年生の中頃には私と碁との出会いも週一度になり、さらに週2度というふうに数をますようになりました。そして卒業する頃には3段強の棋力に上り、会社勤めをする様になってからも、週一度はかかず事なく碁会所通いを続けて去年あたりになって一応は碁会所5段というところまでこぎつける事が出来、帰郷すれば、かつての雲上人であった郡山のトップクラスの打手に先番で充分打てる様になって、自分としては一応の自負を持つ様になりました。ところが今年になって通称アマ研という、アマチュア同志の集に紹介され、入会して驚ろいた事に、そこでは私が一番弱く、東京だけでも私以上の人が100人や200人ではきかないと聞かされた事でした。そこで私は決心しました。私ほどの碁好きがあと2子は上達出来るはずだ、いや必ずそうなってみせると。

現在私の家の囲碁人口は、父、次女をなくし4人になってしまいましたが、年に一度は母を囲んで、父、姉のこと、子供の頃のことを石を戦わせながら夜を語り明かします。これは、これから先、兄弟が集まれば続けられていくことでしょう。そして私の生涯を碁と共に歩んでくれることと思います。私も出来得るだけたくさんの子供を持ち、その子達と一緒に楽しく碁を続けて行きたいと思えます。

(小川建築設計事務所勤務)

職場だより

山村 元吉（建築34年卒）

日頃建築の図面は書いておりますが、文章を書くことは苦が手であります。私は、建築でも数ある職場の中の地方公務員として働いております。最近新聞紙上で特に、風当たりが強いところであります。しかし、こんな公務員の職場もあることを紹介したい。

私の处では、事務室において煙草は吸えないし、お茶も飲めない、しかし、これは事務室内のことであり、煙草は喫煙室で、お茶は湯沸場で飲むことは自由である。このことを実施して二年間過ぎましたが、はじめ煙草の好きな人は、トイレと喫煙室を往復していると、椅子の温まる暇がなく、大変に困った様子でありました。これも近頃ではだいぶ慣れたようです。喫煙のことについて今迄の習慣を変更した理事者の理由は、喫煙することを禁止したわけではないし、建物をエアコンデショニングしているので、職員自身の健康管理の面からいっても良いと、一方的に押しつけられた。近頃見えています、煙草は吸う回数もすくなくなり、お茶も面倒で余り飲まなくなりました。朝出勤の確認は印を押すこともなく、タイムレコーダーも無い。しかし、朝8時45分には自分の机に全員すわらなければならない。これは、運用の仕方で、平職員も、また、課長も共に規制できます。今一つ変わったところは、一昨年より、主任クラスの人を民間委託研修生として、一般の会社へ派遣し実務的なものより、むしろ精神的な効果を目的とした研修をさせております。期間二ヶ月学生アルバイトのように、ある者はデパートの売場に立たされ、また、別の人は、家具製造工場で机の組立を手伝って来たようです。私も建築請負会社の現場へ出されました。

公共団体の事務を合理化するために、単純労務の仕事は民間へ委託し、職員の少数精鋭主義を実施して、人件費の節減を行ない、これを、建設事業に振りむけると同時に、職員も優遇すると、理事者より、しばしば聞くがいざ、ベースアップを要求すると、公務員として、法的制限、及び、住民感情の関係で上げられまいと、全くうまく逃げられる。ここで働いている私は、今学校改築工事の現場を見ておりますが、近年流行した歌の文句にある気楽な稼業のサラリーマンと違い、公務員にも時代の流れと共に、きびしさが増して来る様に、営利企業の会社に働く方はより一層きびしいことでしょうが、共に元気で働きましょう。

（三鷹市役所勤務）

私の級友

小 沢 徹（建築41年卒）

建築雑誌などで諸先生方の御活躍を見ていると不肖の生徒だと思ふ。時々学校時代の友人達に会うとそれでもやはり建築の話に花が咲く処をみると一生この仕事から抜ける気がないのだろう。

先日も数人で一杯やろうという事になり各々誘いをかけたが日曜に彼岸の中日と重り、余り常識的な日でない悟った。それでも新宿辺りで会食となると何かホームグラウンドで慣れすぎると考えて、奥武蔵の正丸峠まで足をのばした。

あいにくの曇り空ではあったが空には関係なく、もっぱらダンゴと酒に興味のある吾吾なので、彼岸だと言うのに何んと殺生な事に相なった。まあ日頃仏心のないものだから改めてみた処で相場は知れている。

奥武蔵の自然の中で食べれば別に新宿で食べる松坂肉と変らないものもうまく感じるから不思議である。空気のせいとか環境のせいとか人は言うが、要はいろいろと理由をつけてあっちこっちに出かけてみたいのである。

仕事で車に乗っているとあれやこれや全くせわしないものも遊びとなると気分が変るのと同じ部類に属するのだろう。

自分の事を言っても面白くないが、友人の事だといろいろ噂も又一趣。Sは最近可愛い女と出来ていると聞いたのでそれとなく探りを入れると「いやどうも縁がなくて……」ととぼけられてしまい仲々逃げるのもうまくなったと感心している。

Oは女の子が生れて、父親の感想はと聞けば「いや……」とそのまま話題を変えてしまう。それでも仕事の関係で土木を学ぼうと専修学校へ再入学とは見上げた根性であります。

Aの素行は人の少しは知る処であるが、先日もわざわざ銀座でメシが喰いたいと出かけたそう。そう言えば思い立って武蔵野を歩きたいと一日中行ける処まで関東平野を歩いたと聞くから銀座位はさして語るべき事でないかも知れない。そのうちに彼女が出来たから一日つき合ってくれと言って電話でもかかって来ないかと期待をしている。Oの話によればミロのヴィナス展に行った際折しも降って来た雨を幸いに女の子とつれそって帰ったと聞くが、その後のニュースがないのは誰も僕にささやいてくれないためなのだろうか。

Iは最もとぼけの名人だが最近仕事を取るのが上手

になった様子、頼しきかなである。建築では何と云っても客を取って来たものが一番強いという風潮があるから学校で教えてくれない社会勉強に精が出ているといえるのではなかろうか。

I 事務所にいるはM、昨年会った時、請負会社の車に乗っていて、頭部打撲の交通事故をやったとか、最近の交通事故では誰かがこの難に会うようになっているぶっような状態。こればかりは余り名誉でないのでお互に気をつけなければと人ごとで無い気がする。

昔の友人であって一番がっかりするやら、たのもしく思うのは、皆一様に金に興味と執着が出て来た事だろう。良い設計なら金の程度はいわずまず仕事だといった奴が、決して只の仕事はしませんよと強調しているのをみると皆さん仲々せち辛い社会でお働きの事と思う事が多い。そういう私も金の事は二の次と考えていた時代もなきにしもあらずだが、金をもうける事はこれ又仲々容易ならざるわざと近頃知らされている次第、より多くもうけたいと考えている建築屋さんには技術にも計算にも熱心で先輩諸氏で日夜かけ回っているのを見かけて、どうも私は住みにくい世の中に生れて来てしまったと時々思ひ悩んでみる事もある。

(土橋建築設計事務所勤務)

建築と設備

そして人間無視

宮 沢 孝 夫 (設備40年卒)

1. 一つの建物が完成しました。外部、内部のデザイン、また設備も素晴らしいと誰にも思われたし、使用者も満足しました。これが本当の建築の姿であると思います。我々設備に従事している者は、日進月歩で進む機器を、そして新しい技術を素早くキャッチし、理解しようと努めます。まず考えることは、保守のために便利で安価で、その建築のもつ性質に応じて自由に使いわけができるということこそ、最初に述べた設備における理想であると思います。

建物が出来上って1年もたたないうちに、水漏れ、室

が暖まらない、冷えない、また照明が暗いなどと苦情がでるのは、設備関係には非常に多いことです。これらのことについては、設備だけでなく建築の方々も考えてほしいのです。言うまでもなく、我々の職業は水や空気を流動させることによって、よりよい環境を、また人間が住めるように装置するわけです。ですから建築設計当初から機器に無理がこないように、水や空気になるべく楽に通れるように計画できる者をスタッフの中に入れて計画していくならば、増々有効な“空間の利用”がなされるのではないのでしょうか。このことが理想に一步近づくものであることを、私は確信しています。

2. 最近、人間が機械に使われているということが、よく聞かれます。一例を上げてみますと、私が社会に出て二年過ぎた頃、ある電子計算機メーカーで冷暖房の設計を頼まれました。その時の設計条件が年間を通じて摂氏18度の温度と、50パーセントの湿度を要求されました。冬季はともかく、夏季においてはこの温度では人間の体に無理がくることを工場主任に言いました。すると、その主任が言うのには、このような精密な機械を作るためには、温度湿度共に非常にシビアな条件が要求され、人間はあくまでも機械の次に考えていると聞かされた時私は正直言って腹が立ちました。現在、自動制御の働きで年間を通じて設計条件を満足させる運転を行っていますが、今でもあの時の主任の言った言葉を思い出しますと、人間が将来機械に取って変わるのではないかと考えずにはられません。我々が工場に行くと、そこに働く人達が夏だというのに足が冷えて仕方がないとかよく不満を漏らします。しかし、その時主任とのいきさつを詳細に説明できないのが人情でありましょう。

近い将来、このような不合理な点を解決して行こうと思うのは私ばかりではないでしょう。これはごく小さな人間無視であって、もっと大きな問題が、設備業界には沢山あります。技術革新が進めば、それに比例して多くの問題がでてきます。我々もこのような問題に対して、追付き追抜く努力をしなければならないのではないのでしょうか？

(城口研究所勤務)



どぶろく祭

二宮 茂子（建築36年卒）

御母衣ダム

3,500円を納めて、私は奥美濃御母衣ダム見学、鳩ヶ谷飛弾高山周遊に参加。名古屋に建築学会が開催されそのあとに行われた見学会。名古屋テレビ塔北広場9時出発時は10月16日（42年）バスにはいろいろな人が50余名乗って、愛知県庁一鵜沼一関一美濃と走った。道々には柿がおいしそうであった。秋の色に熟して。群上八幡観光センターで昼食。八幡城に登った。400年も昔、遠藤六郎左エ門盛数が山上に砦を築いたとか。見晴のいいこと。戦国時代ならば、私たちが登ってくるのを見下し、敵だ！討てと矢が飛んできたかも知れない。だが同行の人たちは頭髪の白い人、太りすぎ高血圧病らしき方、含む女性6人、甲冑を鎧い弓箭を帯した怖しげなる勇士も気ぬけがしたし、戦かわじ、勝負ありなんて、城内に展示されたポロボロの道具をながめ想像楽しんだ。

白鳥一蛭ヶ野一御母衣湖に着いた。ロックフィルダムで東洋一の「御母衣ダム」満々と水をたたえていた、水面に紅葉を映して。小、中学校3、神社、寺院3、6部落360戸が湖底に眠っている。ダムの水が万がいちダムの頂部をのり越えると堤体は根こそぎ流されるとか、見かけはずいぶん大きい「一抱えあっても柳は柳」で素質は争えないとダム専門家。

どぶろく祭

私たちが宿る鳩ヶ谷地区はどぶろくまつりであった。轢りなど神社に立ち並び、家々には幕がつりさがっていた。昔よりどぶろくを造っていた。交通が不便で祭礼、仏事、慶事に酒があるとときすぐ手に入れることができないから。明治政府は酒造免許、造石高、販売に関し税をとった。後、どぶろく造は禁止されたがここに白川郷は特例として認められている。部落神社で秋の例大祭に神社に奉獻する量だけ。政府が禁止するのは税源の確保が目的。製造取引を制限。戦争のたびに酒税は上昇。1級酒で4割以上も税を含むとか。市販されている2級酒などアルコール、水飴、葡萄糖、コハク酸、乳酸、グルタミン酸ソーダ、ミネラル、味の素の混合物が含まれているがドブろくは混りものなし——年輩の上戸はなつかしむ。八幡神社に出かけた。荷物を旅館に置いて、オモチャ屋お面、たい焼、綿アメ、金魚すくい境内にところ狭ましと出店。都会の緑日などと同じ。子ども、大人皆で

どぶろくを呑む。遅れてついた私たちは少ししか残っていなかった。宮当番は夜、花代100円を出すとどぶろくを呑めるといった。私は空腹のため気分よくなってきた。どぶろくのアルコールで血中濃度が上がったにちがいない。

建築家曰く、古い文明は美しいすぐれた建物をもっている。美しい建物をもつ国民は進んだ学問芸術の持主。

後世にも保存。酒造家古い文明はすぐれたうるわしい酒をもつ。うるわしい酒をもつ国民は進んだ学問芸術を愛す。建築物が時代の所産で時の世を映す、酒も然り。

夕食は山の幸が多く盛られた竹の子、ぜんまい、わらび、うど、ふき……。無形、文化財「ごだいじん」を食後みた。踊る娘さんたち。三弦、鼓で囃す羽織、袴の男たち皆さん目、鼻、口もとが似ている。この辺では顔型でどこ部落の人かわるそう。大正時代まで維持された白川村の結婚の方法、妻問いに関係ありと思う。

ブルノタウト

建築家ブルノタウトが白川郷を訪ねた。今から35年昔のこと。梅雨の時でいい天候でなかったよう。狭いうねうねした路を小さい自動車で揺れながら岐阜から、下呂一高山一牧戸一白川のコースを辿って、通りすぎる民家川、山、木々の若葉、植え終った水田、川岸の岩までひとつ、ひとつ趣があり、清楚で美しいと。しかし旅館は食事付きにしても高すぎると不平。玄関ばかり広々して階段は巾がなく、けあげが高すぎ、室は障子、襖の仕切では人声、物音がつつぬけ、便所の廁臭は死にたくなるほどがまんができない。

汽車、自動車にせよ通りすぎるころは美しいものばかりなのに私たちが停ったり下車するところにはいかものばかり。田舎でも停止場はきまっていりかもの建築彫しくありと残念がる。ヨーロッパやアメリカの機械文明がこの奥深い里にもいかものを搬んできたとしがった。

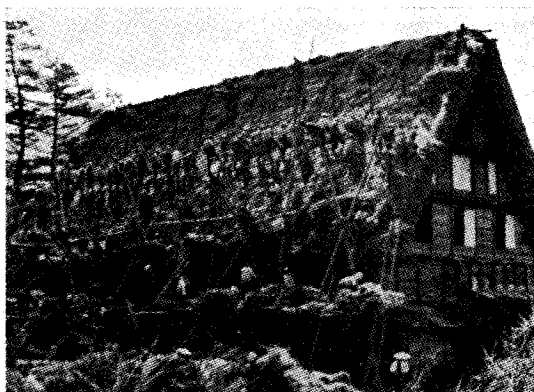
牧戸近くより60°位の急勾配のわら葺屋根をもつ白川型の農家が現われはじめると美しい、見事だと巨大な合掌屋根構造に感嘆。のち日本文化に関し講演した——、

13世紀に源氏に滅ぼされた平家の残党は飛弾白川の山奥に逃れた。自給自足の生活をした。それらの農家は昔ながらの構造を保存しており、その手法はヨーロッパのゴシック式と同様である。屋根はヨーロッパの中世のものと同じく精確三角結合をなし、従の方向の風圧や地震に対して大きな筋違材によって強められ、さらにまた屋根の荷重は最下階においてきわめて論理的に側柱に移されている。白川村の木工は一般日本家屋に見られるよう

に壁付けや建具のはめ込などをする前家屋がずれたり、顛倒するのを防ぐために一時的な筋違補強する必要がある。平家が高度の日本文化、美的にしてしかも同時に合理的な性格を具えた文化の最後の負担者であったという見解により白川郷の謎が説明しようといった。

10月17日

旅館の人たちに見送られバスは出発。この辺の民家もわら葺の屋根が日、一日と減りトタン、瓦屋根と変る。年に七戸ほど合掌造は姿を消していくとか。明善寺のと



なりの家にいった。家主は平家の落武者がこの地に大家族制度をつくった……。その昔ブルノタウトというドイツの建築家が当家を御覧になり構造が論理的で合理的であるといって驚いたものです。炉を囲み耳を傾けていた学会の面々に苦笑。一年中炉火を絶やさないとか。中2階などに芋がごろごろ、生活のある合掌造を見てほしいと家主。祖先が考え出した文化遺産はそのなりたった環境に於いてのみ光彩をはなつ——2階以上の床は全部竹簀張りであり階下の炉の煙が5階まで通じる。養蚕のためとか、建築に釘やカスガイを使わず全部ネソという粘気のある木と縄でしめてあるとか、よくも15米も高い家を一本の釘もなしに建てたものよ、皆で協力一生懸命に造ったのだろう。

高山飛弾民俗館をみ、屋食後日下部家を見学。がっちりした大きな柱高い天井巾とりある部屋、広々とした広がり大平の昔を思わせる。炉の暖かい火があり皺くちやの手で小枝をくべながらお伽話、昔ばなしをする年寄、孫さんたちに。私は黒く磨きあげられた柱、建具などみていると再建されたとはいえ祖先代々の歴史が炉端に聞こえてくるように思われた。

二日ばかりの短かいバスの旅。心余って詞足らずでうまくお伝へできずちょっぴり残念です。

(宮崎建築設計事務所勤務)

格言こうなあ！

発言 芸術は亡びる。故に帝国ホテルは破壊されるのである。

企業 世の中の要求に答えて、公団用縮尺スケールを発売する計画である。

名誉 あなたは、戦前、戦中、戦後、各時代を通じて常に世の指導者であったので、ここに金一封を添え、勲章を授ける。

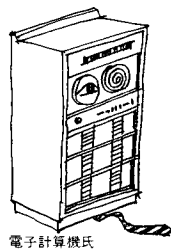
元金 一年の総収入の10倍をその人間のその年間の価値として良いであろう。

郷愁 日本人の風呂好きは、母親の胎内にいた頃への郷愁である。

習慣 最近は、立寝が出来る様になった。

文盲 活字文明時代の文盲は、誤字を誤字として認められない人である。

先輩 黒を白と云えた時、君は政治家としての心の準備が出来たと云えよう。



「現代建築の構造と表現」

Curt Siegel 著 彰国社刊
川口、花井、片岡共訳 ¥ 3,000

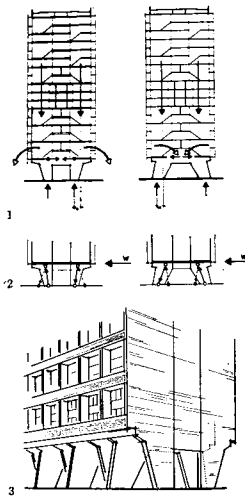
講師 南迫 哲也（建築34年卒）

1. 現代の構造

私たちが働いている現在の日本の建築の諸事情を端的に表現するならば「スケール不在の建築」というほかはいないであろう。つまり建築形態の強調のため構造形式の原理の誇張、構造形式の選択の不適確さからくる空間の不明確な処理、空間の魅力と生活の詩との離縁、生活の実体に対する意志の喪失。手当たり次第、あるったけぶちかます。そうした狂気が無気力と同居している。

私は、そうした状況が「現代だ」という観方には賛成できいな。時代性には関係ない。すべてが逆だと思う。現代とは、物の実体を素直に、積極的に、どんな困難にも負けずに、キメコマカに生かしきることだと思う。

図 1



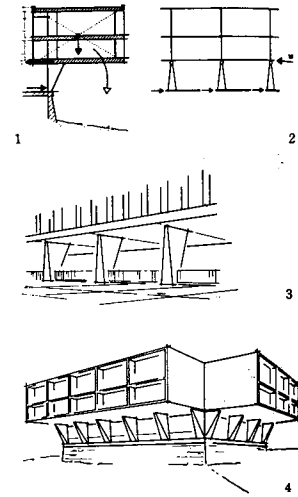
ル・コルビュジエによる高層アパートの傾斜した支柱の対になった配列[23]

- 1 外側に傾いた支柱はスラブで引っ張られ、内側に傾いた支柱は、つっぱり合っている
- 2 交互に傾きが変わる対の支柱は、強固なスラブと結びついて立体的に三角形を構成し、建物に横方向の安定性を与えている
- 3 外観

いや、この定義づけも時代性には関係のない人の世の常あることにちがいない。歴史上連綿として築き上げ、変革を重ねて正当づけてきたこの論理の鎖を私は大切にしたいと思う。

本書はそうした「正当派」の書ということができると思う。骨組構造、支柱、立体構造、の3章に分かれて書かれているが、その順は丁度歴史的な解明の順序にもなっているように思われる。とはいえ、各章毎に未だ解決されていない問題が数多潜んでいることが、この本を読み進むうちに分ってくる。建築の構造形式を考えてみても、歴史的な必然性の一点として、現代もまたあるのだ。

図 2



アメリカのミルウォーキーにある戦争記念館のV-支柱

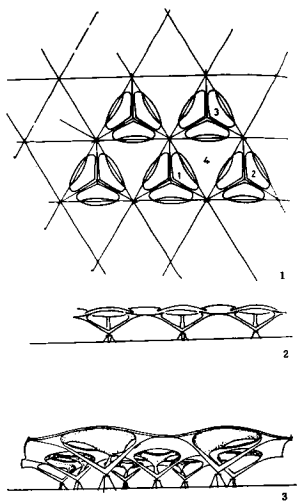
- 1 横方向の断面図はV-支柱の頂部拘束の様子を示している
- 2 縦方向ではV-支柱は倒立して下部が固定されている
- 3 内庭からの透視図
- 4 外側からの透視図は二方向のちがった機能をはっきりあらわしている

以下各章の特徴とその問題点に触れてみたいと思う。

2. 骨組構造

「骨組構造」は剛接された支柱とはりから構成されている「いわゆるラーメン構造」であるが、「現代の骨組構造」は「スティールとコンクリートを合理的に応用した結果」であり、「その特徴はあらゆる支持材を最小断面におさえることと、支持構造と非支持構造とははっきり分離させることにある」という。だがこの「はっきり分離させること」とは一体、具体的にどのような形体的処理と利益をもつというのだろうか。ここでは、柱型を外壁に現わした。柱と梁によってできるグリッドを、この構造体系の一つの建築的な表現であるといい、柱間隔の大小や、ファサードの両側辺と上辺との扱い方、1階において着地の仕方により、この無表情そうな構造形式にも、いろいろな表現が可能であるという。全体と部分のこのような思考方法は現代の一つの必修能力といわなければならないが、ただここで一つ問題になるのは、柱が建物の内部にある場合、つまり隔柱の両側にキャンティレバーのある構造形式の場合には「構造的に非常にスッキリとしたうまい解決策となる」といい「構造とファサードとの間の結合関係はなくなり、内側と外側との統一」が失われ易くなり、「内部の骨組と外装との連なりはなくなってしまう」ので、「まとまりのある建築物のファサードの造型や構造にとっては」簡単に採用できないと結論しているのだが、建築は、建築体の各エレメントにあるのではなくて、建築体に区切られた空間にその質を認めるとするならば、柱から持ち出しの梁そしてスラブまでの細まり方、薄まり方が全体の構造体系の中で、どのような関連づけをしているかが、構造フォルムの一つの見方になるのではあるまいか。とにかく骨組構造特有のグリッドも単に、平面的な比例関係で眺める本書の立場が現在、私達が多くの場合やりがちな態度であり、建築空間思考に、ある限界を作ってしまうにちがいない。

図 3



ナポリ駅的设计案〔51〕

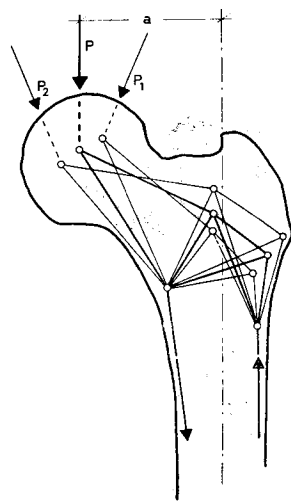
- 1 屋根の平面投影図の上に重なり合う三角形の基本格子、三又支柱は三角形のシェルエレメント(1)、(2)、(3)を支持している。第4のシェルエレメント(4)は、他の三つの間にささえられている
- 2 断面図
- 3 最終フォルムの全景

一」が失われ易くなり、「内部の骨組と外装との連なりはなくなってしまう」ので、「まとまりのある建築物のファサードの造型や構造にとっては」簡単に採用できないと結論しているのだが、建築は、建築体の各エレメントにあるのではなくて、建築体に区切られた空間にその質を認めるとするならば、柱から持ち出しの梁そしてスラブまでの細まり方、薄まり方が全体の構造体系の中で、どのような関連づけをしているかが、構造フォルムの一つの見方になるのではあるまいか。とにかく骨組構造特有のグリッドも単に、平面的な比例関係で眺める本書の立場が現在、私達が多くの場合やりがちな態度であり、建築空間思考に、ある限界を作ってしまうにちがいない。

3. 支柱

骨組構造の一端部である、一階の着地部分は建物全体をいかにたたづまいよくするか、の要所であることは前に記したが、面を上面よりも後退させるという手法はよく用いられる解決策である。つまり足首をキュッと引き締めて見せようということと同時に構造的には基礎の構造体に、上部モーメントを伝えないようにするためにも良い解決策であると思う、特に上部構造と一体となって力

図 4



人間の大腿骨は、高い表現力をもつ立体構造である。種々の方向からの力を図に描いてみると、骨の構造がいかに有機的にこれらに適應しているかがわかる〔53〕

学的解決をしている数例（図1，2，3）は、他の可能性の思考方法を示唆してくれる。

4. 立体構造

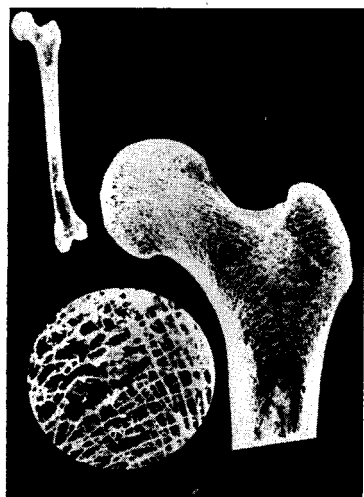
柱や梁という単一材が単一の機能（それぞれ上部の荷重だけ）を受け持つという平面系構造ではなく、「立体性を無視したのでは構造としての基本概念が成り立たなくなってしまうような、部分が全構造系と一体になってはじめて構造的機能を果すような構造形式を立体構造系と呼ぶ、そしてそれらを、立体トラス、折板構造、シェル構造、吊り屋根構造の四種に分けて説明をしているがまだ、建築のための構造フォルムとして「意識的な探究がようやく始まったばかり」の段階なので、これから発見されなければならない要素が山積みされているという感じを受ける。

4-1：立体トラスは「多数の単一部材を立体的に構成したもので、各部材は引張りまたは圧縮の軸力を受けて立体的なつり合い系をつくっている」構造形式であり、部材長の調節、部材断面の変化、任意の方向に任意の数の部材を接合できるピン接点、解析法、精度、応力算定などの諸点に関する実用的な解決が、この構造形式の発展をもたらすものであるという。しかしこのような技術

的な制約がいつの日か解明されたとき、一体この構造形式にはどのような構造フォルムの可能性があるというのだろうか。正多面体は20面体までしかないのであるからある歪みがある個処に予見しておかなければならない。フラードームのように、構造フォルムの特徴としては少々アイマイな変形による解決ではなく、「アルマジロの甲殻」のように明瞭なパターンの大小の変化による表現があってよいし、また「人間の大腿骨」の組織のように剛性のある膜面による立体構造が、ある解析可能な整形性を保って考えられるはずである。しかしそれはすでにトラスの範囲を超えたものになろう。

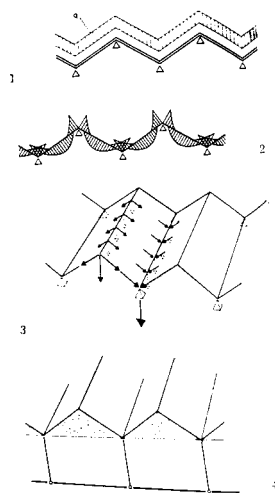
4-2：折板構造は稜線間のスラブの支持能力、稜線に平行な平面の支持能力、折板のヒダを確保する壁の3つの要素から成立しているが、この構造フォルムの特徴であるヒダのパターンと寸法は、まだいろいろ考えられそうであり、また折板のラーメン構造はパリのユネスコ会議場や、日本では群馬音楽堂、世田谷区民会館などに採用され、また床スラブとしてはデトロイトのマクレガー記念会館に応用されているが、支持方法には柱が使用されているといった段階で、まだ折板構造の構造フォルムにもいくつかの可能性が開拓される点が残っている。

写真 1



人間の大腿骨の断面

図 5



折板構造のはたらき方

- 1 稜線に直角の方向では、連続した波形スラブとしてはたらく
- 2 波形スラブの曲げモーメント
- 3 稜線方向では、板はもたれあつたはりのような形で作用する
- 4 妻のところでは、ひだの形がくずれぬよう補剛しなければならない

4-3: シェル構造は形の上でわん曲しており、構成している材料の点では強くて固いものである。わん曲の仕方により筒形シェル、回転殻、コノイド、H.P.面、などが、数学的に把握可能であるということから多く使用されるのであるが、自由な形態も、E.トロハなどにより実験的な方法によって、データが収集されつつある。要は、荷重状態に応じたわん曲の仕方と、そのわん曲面の確保をするための経済的な2次的わん曲面、などにより素直な形態がいかに実現されるかにあるのだ。V.レウエルのトロント市庁舎の背壁が円筒シェルー重で出来ていることはこの構造も建築要素の各部への応用がまだ広く残っているように思われるし、シェル面を確保するためのリブがそのまま全荷重を支える柱に変形するその連続性を創造するためには立体的な形態に対する敏感な能力を要求されるであろう。

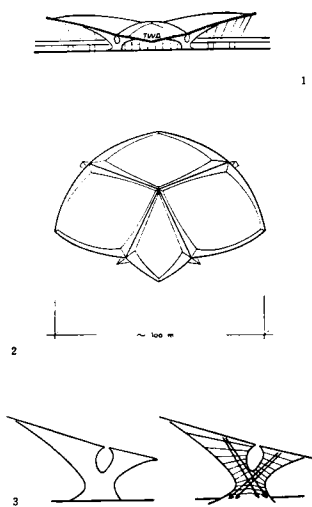
4-4: 吊屋根構造は屋根面に対する風圧によるバタツキをいかに防止するかが主要な問題である。一つの解決

策は、代々木の屋内体育館のように屋根面自体の剛性を保せることだが、これはこの構造の目的とする部材の経済性に反し、本来の解決とはいえない。E.サリーネーのエール大学ホッケー場では、逆方向にわん曲したケーブル網の緊張によってその剛性が与えられているのは本来の解決策と言えよう、またカナダ万博における西ドイツ館のようにテント式の緊張による解決もよい解決とされている。

5. 将来の構造

構造形式の発見は今世紀に入ってから見覚ましいものであることが、本書を読むことによって知るが、同時にそれがまだ取り出されていないものと比較するといかに少いものかということを知ることにもなった。しかも現在判明している構造形式が、いかにその原理を素直に、あたりまえに実現されることが少いかを知ることにもなった。私たちがやらなければならぬことは 沢山ある。

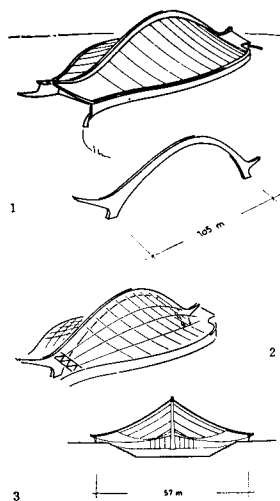
図 6



ニューヨーク、アイトルワイルド空港のTWA. の建物 [134]
に見られる自由な形のシェル
建築家: イーロ・サリーネン、構造家: アンマンおよびホイットニー

- 1 正面図
- 2 屋根プラン——4個のシェルは帯状の窓で分離されているが、支持点は4個しかない
- 3 力の方向に応じて、自由に造形された支柱

図 7



ニューヘヴンのエール大学ホッケー場 [157]

建築家: サリーネン、構造家: セビラド、エルスタッドおよびクルーガー

- 1 図210.4 のテント構造に似たやり方で、1個の巨大な鉄筋コンクリートアーチに、ケーブル面を張っている。構造的にも、また形の上でもテント構造との類似がはっきり認められる
- 2 テント構造やケーブル構造では、押えケーブルのわん曲を吊りケーブルとは独立に端部で逆転させることはできない、したがって、この部分には鉄骨のトラスを補助的に用いている
- 3 横断面を見れば、この個性の強い構造フォルムが、空間の機能とよく一致していることがわかる

私の読書

小儀 一男 (建築40年卒)

「建築に何が可能か—建築と人間」

原 広司 著

定価 800円

株式会社学芸書林 67年11月刊

「建築とは何か」という問は「人間とは何か」という問が不毛であると同様に行動の指標にはなり得ない。「人間に何ができるか」と問うべきであり、「建築に何ができるか」と問うことが必要である。「建築に何ができるか」の問いは、建築活動が人間存在一般にかかわる問いそのものを開示しており、建築を美という観点から考察するのではなく、論理的、哲学的に考察しようとする。この姿勢がこの著書の根本を流れている。

最近、設計方法論や建築哲学の必要性が叫ばれているが、創作やデザインの決定において理論がどの領域まで可能か、又創作やデザインは主観的な領域が占める割合が大きいが、客観的領域を拡大することによって説得力を獲得し、社会化することの必要性を著者は考察する。

現代を多様化する時代ととらえ、現代の政治家、芸術家、思想家はこの多様化に対し解決を見い出しておらず哲学の貧困を指摘している。このような多様化された現代において、建築はどのように対応すべきか、それを被覆性と挿孔作業の論理に見い出している。現代いたる所に見られる建築、それはミース・ファン・デル・ローエによって完成された均質空間であるが、この均質空間は統計的客観性によって人間を平均化する。平均化された人間は無気力化し、疎外現象を起す。それが被覆性であり、被覆性は現代建築の特性であるばかりでなく、現代文明の特色でもある。それを打破するものが挿孔作業である。挿孔作業において、人間にいかに直接性を回復するか、その直接性をいかに連帯にまで高めるかが問題にされている。近代建築の最大の弱点は集団における考察の浅さにあると指摘し、個人的な行動の多様化は、連帯した集団を媒介としなければ期待できず、禁止の被覆は集団の投企なくしては破れないこと、従って多様化の展開は、あるいは非連続ののりこえのためには連帯の論理が必要である。人間の連帯を問題にする時、部分と全体の

関係は個人と集団との関係、あるいは小集団から大集団の関係にいかえられる。都市や建築は集団をどのように形成して行くかにかかっている。

著者の建築論は、空間単位の集合を必然性のうちに構成しようとする有孔体の理論、又、互にずれの糸のっている人間の連帯を浮遊状態において育成されるのではないかという浮遊の思想によって展開されている。

ラッセル サルトル他「ラッセル法廷」

—ベトナムにおける戦争犯罪の記録—

ベトナムにおける戦争犯罪調査日本委員会編

定価 380円

人文書院 67年9月25日刊

私達にとってベトナム戦争は無関係な問題であろうか。無関係と答える人はほとんどいないはずである。しかしベトナム戦争をどうとらえ、何をしたらよいかを問う時、無力感におそわれる。

新聞をはじめあらゆるマスコミで毎日のように報道されているベトナム戦争は、現在行われている現象を断片的に伝えるにすぎない。私達が知らなければならないのは、ベトナム戦争の本質は何か、その歴史、法的根拠、さらに現在の日本のおかれている現状からくる報道の事実の制限等である。それらの問題に答えるのがこの著書である。

ラッセル法廷は、イギリスの哲学者バートランド・ラッセルがベトナムにおけるアメリカの戦争犯罪を裁くために国際法廷をひらこうと「人類の良心」に呼びかけ、それに答えてサルトルをはじめ、著名な、かつ地理的的代表によって構成されたのである。

本法廷の機能は、いかなる私人、もしくは公人に対し判決を下す意図はなく、ベトナムでおかされた可能性のある戦争犯罪の証拠を科学的に、かつ公正に深く検討しその証拠を国際世論にひきわたす調査機関である。法廷の唯一の目的は、国や政治信条にかかわらず、すべての諸国民を尊重し、自由な探求の伝統にたつて、恐怖やひいきもなしに真実をみつけたことである。そしてこの記録は国際法廷(1967年5月2日~10日)の第1回法廷(ストックホルム)における以下の5項目の内の第1および第3項目についての記録の要約である。

法廷の審理すべき項目

(1) アメリカ政府（およびオーストラリア、ニュージーランド、南朝鮮の政府）は、国際法によれば侵略の罪を犯しているか？

(2) アメリカ軍は、新型兵器や戦争法規によって禁止されている兵器（ガス、特殊化学物質、ナパームなど）を使用もしくは実験しているか？

(3) 病院、学校、療養所、ダムなど純粋に民間の性格をもった目標に対して砲爆撃がおこなわれたか、またその規模は？

(4) ベトナム人捕虜は戦争法規によって禁止されている非人道的取り扱い、とくに拷問や手足切断などをうけているか？ 人質の処刑など、一般住民に対する不当な報復行為がおこなわれているか？

(5) 強制労働収容所がつくられているか、住民の強制移動など住民絶滅を目的とし、法律上大量虐殺行為と見なされるような行為がおこなわれているか？

私達がベトナム戦争をどのように解決するかを考える時、サルトルが来日時に『知識人の擁護』の中で明らかにした次の言葉を考慮する必要がある。「われわれの世界では、戦争は植民地主義戦争であれ、新植民地主義

戦争であれ、帝国主義戦争であれ、その性質上、平和によって帝国主義者が利益を得るか、主権をかちとろうとして反乱をおこす諸国民が利益を得るか、いずれかしかないことによっている事実を理解しなければならない。もしどちらの陣営にも好都合にならない平和をのぞむなら、それは平和をのぞむことにはならない。道徳的に戦争を断罪する人がいるが、それはだれであれ、ジョンソン大統領を含めてみんながしていることだ。」

最後に、雑誌『世界2月号』に掲載されたサルトルの論文「ジェノサイド（民族みなごろし）」は、ベトナム戦争と私達とのかかわりあいとを適格にとらえている。ベトナム戦争は、民族の自由と自決の権利を主張するすべての人民への挑戦と脅迫として用いるみせしめの戦争である。そして連日私達のすべての面前で犯されつつあるこの犯罪が、それを告発しないすべての人間を、私達を一そう隷属させるためにまず堕落させようとする犯罪者たちの共犯者にする。というのはアメリカがベトナム民族を通して打撃を加え威嚇しようとしているのは、まさに人間集団全体なのであるからである。

（大和ハウス工業・東京支社設計部勤務）

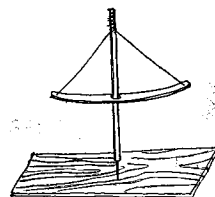
囊 中 の 錐

大工さんが、仕事がすんで帰りがけに、錐を袋におさめる。すると袋の底から錐の尖ったさきが突き出る。錐だけは危険でしょうがない。これを「囊中の錐」という。錐の尖ったさきは袋にいれておいても、やはり隠しようがなく外にあらわれる。才智のある者や技術のある人は、そのままにしておかれることがない。史記の平原君伝に、「錐、囊中に処る」というたとえがある。一説に錐の柄だというけれど、そうではあるまい。

日本のことわざでは、「錐、囊にたまらず。」とか「錐、囊を脱す。」とか「錐は囊。」ともいっている。無名抄に「何事をも好むほどに、その道にすぐれぬれ

ば、きりふくろにたまらずとして、その聞こえありて」平治物語の牛若奥州下りの条では「錐、囊を脱すといえは、始終は平家に聞こえなん。」とあるし、また嘉吉物語をみると、「錐ふくろに脱するならひなれば、つつむとすれど、此の事京都に聞こえしかば」とある。また、堀河波鼓に「拙者は他言すまいが、錐は袋と、外よりの取り沙汰は存ぜぬ」と事の露頭をことうっているようなものは、みな史記平原君が出典である。

（建築工具史話 李家正文著
より抜粋）



同窓会発足を喜ぶ

米杉 泰二 (建築41年卒)

この度、卒業以来の念願でありました、同窓会の発足が決定しましたことは大変嬉しく、心から喜ばずにはいられません。

私は先輩、後輩という連体性の中で親密感を強く抱かせることの出来る同窓会が、今、様々の思いでの工学院大学建築学科にも生れて、縦のつながり、横のつながりを保ちながら、この未知なる会が無限の前途への可能性を有し、発展して行くことを望み、それが更に一步、社会に飛躍するものだと言確信するのです。私達、一人一人の社会での活躍と精進と共に地道に、又、着実に年輪を克明に印して、大きく豊かに育ってくれればと思っております。そして、我々若輩達の進歩前進のためにも先輩諸氏達との有意義な親交の場となりますように希望します。

全く早いもので、私が、社会に飛び立って以来、早二年にもなります。正に光陰矢の如しであります。

仕事一筋に邁進しなければと思いつつもままならず時にはネオンの洪水の中での一時の快楽に興じ、コーヒー店の片隅で憩うこともありました。又、新宿の目覚ましい副都心ぶりに目を見はり、驚嘆し、人の群の中を右

往左往することもしばしばでありました。目まぐるしく移り過ぎて行く都会の生活に己自身を融和して行くことが出来ず、彷徨しているうちに季節も真赤な太陽の夏がやがて、紅葉の中で感傷的になる秋へと過ぎて行ってしまう、こんな季節の耽美な自然現象さえも見逃がしてしまうこともありました。

学生時代のあの懐しい奈良への旅行を思えば、枯葉の中を歩きながら、古き都の榮華を偲び、夕日に映る薬師寺の塔の輝きに心を踊らせたことなど。現代のテンポの早い社会生活の中で、ともすれば失いがちなこの様な自然への旅情のあこがれと、心のゆとりを取り戻したいと思うのであります。そして、明日からの仕事のために鋭気を養い、豊で新鮮な心持で再び仕事を遂行したいと思ひます。

この多忙極まる現代の社会の中で育っていくこの同窓会の行く手には、多くの障害と苦悩曲折が待ち受けていることもあるでしょうが、それを乗り越えて立派に育生して行くではありませんか。

施工雑話 トランシットに頼り過ぎた話

現場員 「今使っているトランシットはどうも調子が悪いのです。」

主任 「でもまだ新しいはずなんだが。」

現場員 「外壁の堅墨をトランシットで出したのですが1階から5階迄墨が通らないのです。階によっては3cm も違っているのです。」

主任 「ほは、では君はトランシットをどういう風にして使ったのかね。」

現場員 「今日は少し風があって下げ振りが動きますか

ら、建物の見とうしのきく所にトランシットを据え、1階の通芯を外壁に

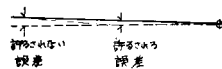
出し、それをトランシットで覗いて、各階ごとに点を取って5階迄出したのです。そして各点を結びながら墨を打って行ったのです。」

主任 「成程、そこで。」

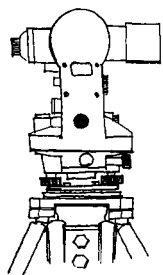
現場員 「5階から下を見ると、打った墨が一直線になってい

ないのです。仕事は正確にやったはずですが。」

この現場は、5階建のアパートを建築中で、左官墨を出すために大工と一緒に新入社員が外壁の堅墨を出して時の話です。しかも大工がそんな墨の出し方では正確には出ないといったのですが、彼はトランシットを使うのだから間違う筈がないと云い張ったのです。いくら仕事を正確にしても根本が違っているは何もなりません。



墨の引延しは2点間の2分の1位にとめる事



建築学科同窓会によせて

望月 大介（建築39年卒）

本学建築学科卒業生数も今年で2,500名近くに達したことは、卒業生にとって大きな喜びであります。しかし、今日まで、建築学科独自の同窓会がなかったのは残念に思っておりましたが、昨年から先輩諸氏のご努力により、同窓会発足のはこびに至りましたのは誠に喜ばしい限りです。この新しい世代の同窓会が、本学に古き伝統を誇る校友会とは、別に設立され、我々、若輩の身近な会として、今後増々発展して行く事を期待しております。従来われわれは、卒業と同時に校友会に入会するのが一般的傾向でありましたが、実際は無関心の同窓生が大半であり、会費納入による校友会名簿記載という形式上のもののみで、実感としてはかなり離れた存在であると思われます。この現象の原因は、一つは工手学校時代の先輩の方々と、新制大学卒業生との交流や対話を全くと持たなかったことと、もう一つは大学卒業生の急増化による連体感の低下であると思われます。工手学校時代の先輩の方々におかれましては、現在建築界の各部門でご活躍されておられるのは、校友会誌、雑誌等で拝見致しておりますが、実際に先輩と後輩の連りは、実感としてはとらえにくいのが現状ではないかと思ひます。この様な

状況の中で、この度、大学卒業生を中心とする建築学科同窓会の設立は、必然的なものであると思ひます。

大学卒業生も約2,500名を見るに至り、これは、本学建築学科の隆盛を示すものであると同時に、注目すべき問題をなげかけていると云えましょう。特に本学の最近学生数の急増は世の流れに歩調を合わせるが如く、大きく脹れ上った。この結果、教師と学生間、学生相互のコミュニケーションの希薄を招き卒業後の社会での同窓生相互の交流も低下しています。

それではこの度の同窓会発足はこれらの問題に対して有効な役割を演じるためにどのような方法があるでしょうか。年々急増する同窓生相交間に新しい姿の同窓会組織と、コミュニケーション・システムの確立が必要でありましょう。形式上の組織ではなく、同窓生の総意を反映できる方法はどうなるのでしょうか。現代はマスメディアの時代といわれるごとく、同窓生相互の情報交流と対話の方法の提案は、今後同窓会発展へのきわめて重要なものと思ひます。我々が、日常の社会生活の中で同窓会組織が直接あるいは間接的になんらかの結びつきを持ち建築という共通のジャンルの中で、人間性の回復と生活環境の創造への使命感をかき立たせれば、同窓会の役割りも大きくなると思ひます。

これを機会に同窓生皆様の新しい同窓会組織への提案を期待してやみません。

（工学院大学建築学科助手）

彼は明らかに二つの過ちを犯しています。その第一は、基準点を線だ線を延長し過ぎています。いくらトランシットが狂っていないくとも、これを正確に水平に据える事は、人の手でやる以上は無理な事なのです。トランシット



面に直角にトランシットを置く事

の直下の点と1階の基準点とは一直線になるのですが、それを5階迄見上げて点を取り墨を出した所に問題があったわけです。良く平面で、2点間の墨を出して、そのまま延長して墨を打つたりますが、その場合もその距離の2分の1位迄で止めるべきだろうと思ひます。

第2は、外壁に対してトランシットを直角に据えなかったからなのです。打上げたコンクリート面にはかなり

の凹凸があります。そのために墨を出しているのですから点を取った所の面が正しくなければ当然その点には狂があります。それは平面に墨を打つ時でも凹凸面の場合面に直角にして墨をはじかなければ墨を打つ度に狂ってしまうのと同じ理由です。

建築現場で働く新入社員の諸君、製図板とT定規だけで建物を作ろうと考えてはいけません。又トランシットに頼り過ぎてはいけません。自分が今やっている事が間違っているかも知れないと絶えず再確認して行事が必要だと思ひます。

最後に、下げ振りを買う時は、下げ振りを水糸で垂らして回転し、下げ振りの先が一点で止まるのが良く、重い下げ振りを使う時は普通の水糸では切れると危険だからビヤノ線を使うべきであろう。

学祭を観て

浅見 欣司 (建築34年卒)

学校の近くに居て毎年学祭を観て居る。今年の学祭は建築学科同窓会総会と重なった為に、何年ぶりかで良く観ることが出来ました。

学祭らしい事を始めたのは、私が3年の頃が第1回目だと思います。その時のテーマがやはり今回と同じ新宿駅を中心とした、淀橋浄水場跡の文化センタの計画でした。今年のプロジェクは、東口を中心としての再開発が中心でしたが、同じ新宿をテーマとしながらも10年の時の流れは、やはり大きく感じられました。それは一方で、設備コースの学生達が、中心になって計画した、地域暖房計画、又、構造を専攻している、学生達が計画した、スペースフレームや、大架構々造の模型を観る時学生達の目が、都市計画あるいは、都市設計の方に向いているのを感じました。それは一方で、建築学科1部、2部、1年生から4年生まで含めて行われた、住宅コンペに応募した数が17点しか無かったと云うことは、住宅の設計が、建築科の学生の手から離れて、インテリアデザイナーや、インダストリアルデザイナーの手に渡ってしまったことを意味するのだろうか。住宅は、建築のテーマでは無くなってしまったのだろうかと言う疑問を發せずには居られません。しかも内容を観て行く時、一体何をテーマにして、その住宅の特徴を出して設計したのか解らない作品が多い。その中で、私の設計事務所で一諸に設計をしていた、林健次郎君が、1等になったことを大変に喜んでおります。

建築を学ぶ時、私達は、身近な家具什器から始めて、個室、住宅、住区街、都市、国土と拡がるその過程の中で、それぞれの目的をもった、建物を他との関連の中で設計して行く時、基本となるのはやはり一家族を単位とした住宅、又は、住戸であると教えられた。だから住宅が分るまで訓練することによって、建築のあり方が分って来ると言うのが、私が、習った方法であった。10年前、学祭の西口計画もそんなテーマで進めたと思います。新宿の西口が、大きく変わった以上の変化が学生の中にもあるのを感じました。

学祭が学校で学んだ、日頃の研究、学問の發表であるならば、デザイン、構造、設備だけでなく、建築史についても何か發表があってもよかったのではないかと思います。

す。特に最近は、都市の膨脹によって近郊にある民家を取毀す例が多いが、この様な保存しにくい貴重な財産を記録し發表する事は、学祭としても有意義な事ではないかと思います。

先生方からの展示ももっと欲しい氣が致します。第1回の時は、堀越先生の八丈島の民家についての調査があったり、天野先生が設計された。音羽の家のパネルが展示してあったり、先生と学生が一緒になって、研究を發表し合うことが行なわれましたが、今回の展示には無かったように思います。出来れば来年から同窓生のコーナーでも設けて、学生と先生と卒業生が、それぞれ日頃の研究、仕事の發表の場としてゆけば有意義な学祭になると思います。

(永建築設計事務所勤務)

建築を考える……

二宮 茂子 (建築36年卒)

建築学会関東支部主催の第3回討論会「建築を考える—建築にたずさわる者は社会の要求にどう応じるべきか—良心—責任—姿勢について」に出席。企画した人たちは20代の人たち。会場の高輪プリンスホテルは、男女の学生が約半数。将来は建築家になりたいと夢をもつ浪人中予備校生なども混ざって。私も30をなかばすぎの女性と、20代の意見を述べよう聞こうとおしかけた。

いい年をしてヤジ馬根性も甚だしいと思ったが。

活発な意見……大人に建築をまかせてはおけぬ……帝国ホテル、海上ビル問題は……。他のひとりには、我々が使う木材、建材として役立つように育てるのに30年、40年かかるが現在は使うだけ使っている状態。いまに事欠く時代がやってこないか、植林、造林を考えるべきではないか。同様砂利について、職人問題……。

施工関係の仕事をしている人の言。私たちはいつも泣かされている。建物をたてる。さて予算が不足だ。

施工屋さん何んとか頼みますよ、して下さいよ。冗談じゃないよ。予算はないが工事はしてくれ……施工屋は魔法なんか使えませんから……施工屋の不満。

討論のあとパティーがあった。40年も建築ひとすじに過ごしていらした女建築家の乾杯の音頭で幕が上がった。お客のアトリエ磯崎新先生。美貌と若さの先生は学生群にいく重にも取り囲まれ人気の的。黒い顔に顎髪の吉坂隆正先生もそのあご髪にものいわせ交わっていたし、藤井正一郎、前川喜寛先生などの方々もいろいろなうらばなしを披露なさってヤンヤの拍手をあげた。

昭和42年度の日本と世界の動き

- 1 月
29日 第1回衆議院総選挙投票, 4県知事選挙も投票
- 2 月
17日 国会, 佐藤栄作を首班指名。第2次佐藤内閣成立前閣僚をそのまま再任して発足
23日 警視庁, 病菌豚密売グループ摘発開始
- 4 月
1日 大阪府泉南町で南海電車, トラックと衝突, 死者5, 重軽傷200……………
15日 都道府県知事, 2大市長, 都道府県議選挙投票
東京都知事に社共推薦の美濃部亮吉, 当選
- 6 月
5日 中東戦争ぼっ発, イスラエルとア連合, シリア, ヨルダンなどの国境で交戦
17日 中国, 最初の水爆実験成功と発表
- 7 月
13日 太平洋横断の「コラーサ2世」号, 横浜入港
23日 デトロイトで黒人の大暴動, 州政府, 非常事態宣言, 24日ジョンソン大統領連邦軍隊を派遣, 死者41人, 負傷者1,000人
- 8 月
1日 西穂高岳で登山中の高校生パーティーに落雷, 死者11人, 負傷11人
8日 東京新宿駅で, 米軍航空機用燃料積載のタンク車と貨車衝突, 炎上, 交通混乱
20日 第49回高校野球大会, 習志野高校優勝
- 9 月
26日 東京都建築審査会, 皇居前の超高層ビル建築不許可を取消すと裁決
28日 三井三池三川鉱で坑内火災, 7人死亡, 200余人CO中毒
- 10月
8日 佐藤首相, 第2次東南アジア訪問に出発, 反日共系全学連の抗議デモ, 羽田で警官隊と衝突, 学生1人死亡, 双方負傷数百人, 学生58人検挙
18日 ソ連の「金星4号」, 史上初の金星軟着陸に成功(6月12日打上げ)
20日 吉田茂元首相死去。
28日 プロ野球日本シリーズ, 巨人優勝
- 11月
13日 べ平連米空母水兵人横須賀で脱走と発表
14日 ワシントンで日米首脳会談開始, 小笠原は1年以内に返還発表

昭和42年の建築界の動きと解説

42年度の建築界の問題点をあげてみると

1. 皇居前の超高層建築 都市美観論
1. 三井霞ヶ関36階建ビルの建設
1. 帝国ホテル取壊し
1. 自動車と人間の共存共栄の問題
1. 万国博の工事開始
1. 質より量の住宅対策
1. 坂出市人工土地の建設
1. 新宿西口広場の完成
1. 都市論未来論の流行

昨年度の建築界は都市論が花やかだった割には実際に建った建築は問題を含むものが少なかった。一昨年の京都国際会議場, 千代田生命本社ビルに比較出来るものと云えば電通ビル, 山梨文化センター等であったがそれ等も都市論と住宅問題の重要性に比べれば問題になるほどのことはなかった。

都市の未来論がはなやかにバラ色に輝いている中で現実の都市の再開発が我々の共通の遺産である貴重な文化財を破壊することで進められたり, 是非再開発を必要とする場所を乗り越えて明らかに失敗だと解る建設を強行してみたりして官僚主義と都市の土地私有制度, 資本のエゴイズムがよいよい民衆の前にその姿を露骨に現わして来たと云えよう。

住宅対策も都市公害も実は我々がこれ等をコントロールすることから解決されてゆくのに現実には都心から通勤時間が一時間半以上もするところに数千戸の団地を建てて住宅は質より量と云ってみたり, 自動車の排気ガス還元装置ぐらいで空気がきれいになると見せかけたり小手先だけの解決方法しか示されない。

都会のはなやかさとは裏はらに青少年犯罪が激増しフーテン族等という形骸擬装病者がうろうろしているのも深刻な住宅問題をかかえているのに万博を開くという考え方に一脈通ずるものがある。

しかし新宿西口を頂点とする再開発が失敗もあるが除々に確実に進行していることは記録されなければならない。特に今度, 全国各地に建設されている高速自動車道路はこれからの建築を大きく変えてゆくだろう。

未来の都市は決してバラ色ではない。我々の大きな努力と技術の蓄積があって始めて可能となる。昨年の建築界はこうしたバラ色の未来論の上に現実の住宅問題がオーバーラップして大きく方向を変えようとしているかの様にみえる。(浅見)

お知らせのページ

編集室よりのお願い

“同窓会誌は一応目を通すよ”“又次号を頼むぜ”こんな会誌にしよう。皆様の原稿をお願い致します。

次号 43年11月3日 予定

会誌名称 創刊号は名称がありません。親しみのある名称をお願い致します。採用の時は薄謝を呈します。

原稿募集 会員の皆様から次の要領で原稿を募集します。

テーマ 特に定めません。御意見・研究・紀行・記録・随筆・詩歌・俳句等、建設的なものただし未発表作品に限る。

枚数 400字詰原稿用紙5枚以内

締切 43年7月30日迄

送先 工学院大学学園同窓会事務局(新館8階)

注意 原稿には必ず卒業年度、コース、氏名、住所、勤務先を明記の事

同窓生の皆様へ会費納入についてのお願い

いよいよ春を迎え、皆様お元気でお過の事と思います。私達の建築学科同窓会が発足して早や一ケ年と四ヶ月、ここに会誌創刊号を発刊し、お手元に配布出来ましてやっと型だけは整いました。今迄は学校、並に校友会の援助があって運営して参りましたが、昨年四月から私達の会費によって活動致しております。又昨年11年に発足した学園同窓会の費用もこれに加わり、年間約100万円程の予算が必要です。この現状を知って頂きまして同窓生諸氏の絶大なる御協力をお願い致します。

なお支払の方法は同封の払込用紙にてお願い致します。

入会金 500円 同窓生全員に払って頂きます

会費1年 500円 最低一ケ年分以上

終身会費 5,000円 終身会員を希望される方

会員名簿 500円 直接同窓会事務局(8階)へこられる方は400円

例

終身会費名簿共(入会金+終身会費+会員名簿
=500+5,000+500=6,000)

終身会費(入会金+終身会費=500+5,000=5,500)

会費担当分科会 浅見 欣司

同窓生の皆様正しい住所・勤務先をお知らせ下さい

同窓会の大切な仕事は名簿の完備にあり、しかも卒業生、在校生の誰れでもが、必要な時に見て利用出来なければなりません。そのためにはあなたの正しい住所と勤務先が必要なのです。同封したハガキの、所定の欄に必要な事項を書き込んで至急同窓会事務局へ郵送して下さい。その後の変更は学園同窓会事務局へハガキか電話で御連絡下さい。これによって、総会のお知らせと同窓会誌は確実にあなたのお手元に届きます。

現在、次回名簿の資料作成を開始しております。

郵送には、卒業年度と専攻を明記して下さい。

名簿分科会 木村 幸弘

広告募集

卒業生の皆様、実社会にて御活躍の事と思います。会誌発行は多額の費用を要します。皆様の勤先、依頼出来る会社の広告をお願い致します。詳細は編集部迄

次号からアルバイト斡旋欄をもうけます。

求人希望の方は編集部迄御一報下さい。

求職希望の方は編集部迄御一報下さい。

編集部

なお同窓会についての詳しいお問合せは各卒業年度の運営委員にお願い致します。運営委員名簿は巻末を御利用下さい。

建築学科同窓会、学園同窓会事務局内

東京都新宿区角筈2の93(342)1211 内線 287

お知らせ

同窓会総会は毎年学園祭の中の日曜日か祭日に行います。在学生の活動及び作品を御覧下さい。当日は親睦会も開きます。ふるって参加出席して下さい。

総会実行分科会

運営委員会

建築学科同窓会会誌に御意見・御感想があれば、お聞かせ下さい。!

想　う　こ　と

宮崎 勝弘 (建築35年卒)

陽の光がすっかり春らしくなり、スモッグの中を吹いてくる風にさえ、春の香りが充ち溢れる様になりました。この春の暖かさの中から、建築学科同窓会会誌が生まれる事は、非常に幸せなことと思っております。

工学院大学建築学科卒業生も早や11回を数えました。卒業生が増えるに従って、だんだん縦のつながり（糸）が切れ、しかも年数が経つと横の糸さえ薄れてきます。一人一人の卒業生が「何か繋がりを……」と思っていたものが、同窓会となり、その繋がりの実際の糸として、——細くとも強くありたい——会誌が出来たことを喜ぶものであります。第一回の運営委員会に於いて会誌発行の準備委員に選ばれ、会誌をどのような形でまとめるかということについて種々考えをめぐらせてみました。誰もが考えることですが、親しみやすい記事、会誌の発行が待ち遠しい、というような内容を盛りたいと思い、ま

た、実社会において種々の分野で活躍している多くの同窓生の為に、なるべく内容の片寄らない様、何となく自分の近況や体験を知らせたくなるような雰囲気。そのような冊子としたいと思いましたが、気多くして内容を伴わず、不本意ながらこのような会誌となっていました。号を重ねるにつれて、だんだんと良いものにしたいと思っています。同窓生の皆さんの暖かい後押しに依り、建築学科同窓会誌が他に類のないユニークな会誌に発展する様、編集員一同が努力を惜まないつもりであります。

学園祭の頃は普段忘れていた学園を思い出し、この会誌を手にとって新宿に集って来る。何年会わなくとも、この会誌を通じて話しあえる……。そうです。この会誌を広場として、同窓生の皆さんが、いつも顔を会わせようではありませんか、十年前に卒業した先輩も十年後に卒業する後輩も、この冊子を通じて、建築、人生、世間話が親しく出来るように、育てて行こうではありませんか。そのような会誌になったら、どんなに楽しいことでしょう。

——同志よ、これは本ではない。これにふれるものは、
人間にふれるのだから。——ホイットマン——(編集長)



營業品目

美術印刷企画制作
カタログ・ポスター
商業写真・報道写真
カラーライブラリー
ギフト用品販売

10年で2倍！

三井の貸付信託



三井信託銀行

本店・東京日本橋三越となり 270-9511
新宿西口支店・東京新宿京王百貨店1階 342-2251

株式会社 富士工業

東京都千代田区神田猿樂町1丁目9番地
TEL (291) 1950・1204

総会記事

設立総会

日時 昭和42年1月22日(日)午後1時30分

会場 工学院大第一会議室

出席者 56名(委任状198名)

1. 開会の辞

杉野準備委員長より同窓会設立総会の挨拶がなされた。(続いて故平岡教授の御冥福を祈り1分間の黙祷が行なわれた)

2. 来賓挨拶

横田建築主任教授、保岡設備主任教授により、同窓会設立総会開催の運となった事の祝辞がなされた。

3. 議長選出

議長 後藤輝彦(設備1回) 副議長 倉持道夫(建築7回) 書記 矢下光次(建築5回) 愛川高朗(建築8回) と指名選出され承認された。

4. 経過報告

浅見欣司(建築2回)氏により第一回設立準備委員からの経過報告が行なわれた。

5. 会計報告

大森寿一(建築4回)氏により報告、収入1179,200 支出245,745、収入は、校友会から建築学科同窓会設立準備資金として受領し他は41年度学生の校友会々費の内、分割受領分である説明があった。

6. 草案説明及承認

杉野準備委員長から一般的説明がなされ、規約の検討に先だち南迫、宮崎氏他2、3名からの動議によりこの会を同窓会設立総会として認める事の賛否を問ひ出席者多数により、承認された。

続いて、小高氏により、規約審議、承認の方法として一括か、各章毎のいずれにするかの決定をすべきことの動議が出され、各章毎との決定がなされた。

草案質議の中での問題点は、第一は短期大学卒業生入会の件で、草田、金田、福田各氏からの入会希望意見が出されたが、現在は、正会員を大学卒以上という原案通りという事で可決された。第二は、第12条の6項で、運営委員会は、予算及企画、重要事項を審議、議決するとあるのを、議決の部分削除した事で、金田、宮島、宮崎、飯島、木村各氏の活発な意見が出された。その他は、一、二カ所の字句の修正、追加があったが、ほぼ原案通り承認され、本会則は昭和42年1月22日より発効する事で、設立総会は終了した。

引続いて、宮崎氏から、この会を第一回総会とする事の即決動議が出され、賛成多数により可決承認された。

15分休憩

第一回総会

休憩後、会則に基く、第一回総会が開かれた。議長団継続を可決承認され、議長は、会長の立候補を求めたが立候補者は出なかったので、運営委員より選出される事となった。運営委員は準備委員を主体とする事の準備委員会側の案が出され、そして互選の結果、

会長 小高 鎮夫(建築・34年卒)

副会長 金田 昭治(建築・33年卒)

” 後藤 輝彦(設備・40年卒)

会計 杉野 福三(建築・35年卒)

と決定承認された。また会計監査は

会計監査 宮島 隆則(建築・34年卒)

宮沢 孝夫(設備・40年卒)

を運営委員会にて選出、総会にて承認された。最後に

1. 会則を尊重する。
2. 組織作りに専念する。
3. 名簿の作成をする。
4. 皆に利用出来る機関としたい。

との新会長就任の辞があり、盛会の内に総会は閉会し、親睦会に入った。

第2回 定期総会

日時 昭和42年11月5日(日)午後1時30分

会場 工学院大学第1議室

出席者 32名(委任状108名)

司会 黒沢秀行氏(建・9回)

1. 開会の辞

黒沢司会より第2回定期総会の挨拶がなされた。

2. 会長挨拶

小高鎮夫会長より参会感謝の挨拶がなされた。

3. 来賓の挨拶

波多江主任教授より定期総会開催のお祝いの挨拶がなされた。

4. 議長団選出

議長団選出については、黒沢司会より会場に図られ議長に小儀一男氏(建・8回)副議長兼書記に倉持道夫氏(建・7回)が指名され、万場一致で承認された。

5. 議長挨拶

小儀議長より議長就任の挨拶がなされた。

6. 初年度事業報告

イ. 運営委員会経過報告

運営委員会記事は詳細掲載（次頁）

ロ. 名簿発行について

高岡敏夫委員（建・6回）

主な活動内容は、

- (1) 印刷部数を1,200部とし、次回発行（3年毎発行予定）までの追加、変更については毎年補充名簿を追加発行する。
- (2) 住所確認のため約1,600名に返信用はがきを送付した結果150枚が返る。これと並行して電話による確認にも努めた。
- (3) 6月7日現在で確認された住所の範囲内で印刷所に廻す。
- (4) 3社の競争入札により「PRプリンターズ」に発注する。
- (5) 申込者に対して289部発送、1部500円（内送料95円）

ハ. 同窓会誌発行について

宮崎勝弘委員（建・3回）

主な活動内容は、

- (1) 編集委員は、委員長、宮崎氏、委員、小高氏、金田氏を選出する。
- (2) 型式はB5判（18.2cm×25.7cm）縦2行割、横書き、表紙をつける。
- (3) 発行日予定日を42年10月1日としたが、原稿の集りが悪く又、創刊号であるから発行予定日にとらわれず内容の充実したものにするように決定する。

7. 初年度会計報告

初年度会計報告（42年9月30日現在）が別紙の通り杉野福三委員（建・3回）より説明があり、次いで宮沢孝夫委員（設・1回）の監査報告がなされ、賛成多数で承認された。

8. 2年度事業計画

イ. 同窓会誌発行

宮崎委員

発行は原稿が集まらないことおよび、予算の関係から年2回が限度である。

質疑応答として、名簿に不備な点があるので、会誌に名簿の訂正についての項を設けて欲しいとの意見があり、訂正の項は設ける予定であると宮崎委員の解答があった。

ロ. 準会員（学生会員）助成

塩谷光吉委員（建・9回）

学祭に対する助成を行う方針である。また卒業アルバム、研究グループに対する助成、バイトや就職の斡旋などもできればやる予定である。

質疑応答として、研究グループに対して助成した場合の成果の発表方法に対する質問があり、具体的な案は出来ていないが、総会または会誌において発表してもらうような形式にして行きたいと、塩谷委員の解答があった。

ハ. 分科会組織充実

ニ. 会員の親睦、厚生施設の充実

ホ. 他同窓会との交流

以上3項目について小高会長より説明が行われた。

(1) 名簿について

クラス毎の責任者を決めて、住所変更などの確認をお願いする。結婚、死亡などについても将来載せる予定である。

(2) 親睦会について

現在は総会後の親睦会だけであり、山の家、海の家はまだ計画していない。

(3) 学生助成について

学生に対する助成は年間5万円を予定している。

(4) 講演会について

まだ具体化していない。

(5) 学園同窓会について

（詳細については、別紙に説明してあるので省略する。

質疑応答として、デザイングループをつくりたいがどのような方法で助成するかとの質問に対しまだ検討中の段階であるが、一応資格は会員全員（会費を納めていない人も含む）にあり、実績が必要、これからやるのでは困る。構成メンバー研究内容を知らせて欲しいとの解答であった。

10. 2年度事業計画による予算案

2年度事業計画による予算案が別紙の通り、杉野委員より説明があり、賛成多数で承認された。

11. その他の議題

その他の議題は主として、学園同窓会についての質疑応答が行われた。（学園同窓会については別紙に説明があるので省略する。）

12. 閉会の辞

黒沢司会より閉会の辞が述べられた。

閉会 3時40分

運営委員会記事

第1回運営委員会

42年2月24日

本校8階第3会議室会場にて議長は小高会長により行われた。

決定事項は次の通り

- 1 事務局を速急に設置し、事務一般を行う。
- 2 本年度事業計画および分科会設置
 - 1) 名簿作成部部長麻生好彦(4回1部建築)
 - 2) 会費徴収部部長浅見欣司(2回1部建築)
 - 3) 会報発行部部長宮崎勝弘(3回1部建築)
- 3 住所確認会員に対して同窓会が発足したことの案内状と会費払込用紙を郵送する。
- 4 同窓会と校友会との関係について討議。同窓会は下部機関とはならず同等の組織として行動する。
- 5 定例運営委員会は毎月第1水曜日午後6時半、本校新館8階第3会議室で行う。祭りの場合は次回に行う。

出席者16名

第2回運営委員会

4月27日

第1水曜日に会を行う予定が出席者が少なかったため27日となる。

- 1 本年度予算細目について。具体的に事業内容が決定しないので延期。
- 2 名簿発行の件(麻生氏担当)
 - 1,200部印刷。原稿締切は5月末。6月末発行。広告は無し。実費は同窓会費より立替払いをしておく。追加および変更はその部分のみファイルシステムにして名簿の後にとじ込む。
- 3 会報発行の件(宮崎氏担当)

会報の内容、大きさ、発行日について宮崎氏が次期運営委員会で詳細報告する。
- 4 同窓会設立を知らない人へのPRおよび設立に不満な人も居るが良く説得して入会してもらい会費を納めてもらう。
- 5 学生会員に対するPR、同窓会三役と学生の話合いを行う。

出席者21名

第3回運営委員会

6月7日

- 1 会計報告

会計の杉野氏より同窓会設立迄および設立後6月7日迄の会計報告がなされた。詳細は別に掲載。なお卒業生の会費納入が少ないので集める方法を考える。
- 2 名簿発刊の件

現在住所を確認された範囲で印刷屋へ廻す。表紙の色は青色に決定。
- 3 学生との話し合い

すみよし会会長遠山氏が出席し学生の声を聞いた。同窓会は学生に何をしてくれるのか。終身会費を学生時に取らず負担を少なくして欲しい。同窓会の名簿に学生の名前も載せて欲しい。

出席者16名

第4回運営委員会

7月5日

- 1 名簿発刊の件(麻生氏より)

現在印刷中で7月中旬頃出来る。名簿の保管を事務局です。発送宛名書は学生アルバイトに頼む。
- 2 事務局長交代の件

事務局長飯島龍三氏、公用多忙のため辞任し、新事務局長に金田昭治副会長が兼任で選出され、事務一般の補佐役を倉持道夫氏(7回2部建築)に受持ってもらうことに決定。
- 3 会誌発刊の件

宮崎編集委員長および編集部員を小高、金田、宮沢愛川氏等に手伝ってもらって原稿集めを行う。
- 4 学生会員に対する援助

建築学科主催の競技の設計に賛加賞を5万円位援助する。(学祭資金援助に変更)

出席者12名

第5回運営委員会

8月2日

- 1 名簿発送経過報告(杉野氏より)

名簿発送宛名書完了。住所確認者の内、代金納入者および申込者に対して、名簿発行の案内状、会費および名簿代金未納者に払い込み呼びかけ文章を印刷し同封する。
- 2 会報発刊編集会議の経過報告(宮崎氏より)

会報の大きさはB5(182×257)にする。表紙を付ける。雑誌名を付けたい。広告を取る。年2回発行。『提案者小高氏より雑誌名をUnity Architecture(建築家の集り、U・A)はどうか、これを南迫氏が反対し、宗教でUnity・Church(U・C)というのがあり、知って居る人を見ると変に思う、よって雑誌名は保留となる!』

出席者12名

第6回運営委員会

9月6日

- 1 会報発刊の件

原稿の集りが悪くて編集ができないので各運営委員に原稿を集めてもらう。肩のこらない内容にしたい。創刊号なので会員の声を多く載せたい。会誌の名称がきまらないので良いのがあったら編集部へ連絡する。
- 2 第2回総会開催の件

総会は学園祭開催期間中に開いて卒業した皆さんに学園祭を見てもらう。第2回総会準備委員は黒沢氏および塩谷氏に決定。
- 3 校友会総会の報告

同窓会と校友会の関係が微妙であり両方の会員になっている人も居るので速急に歩み寄ることができるかどうか検討して見たがまだ時期が早いようだ。

出席者9名

第7回運営委員会

10月4日

- 1 総会開催の件

総会次第(プログラム)の検討。会員への連絡には封筒を用い、案内状の他に、委任状、会費未納者に対

する督促および会員名簿ができていたので買ってもら
うよう呼びかけ文を同封する。返信用ハガキには、会
報発送その他の資料とするため、現住所、勤務先卒業
年度、所属研究室等明記できるようにする。

2 会報発刊の件

近く総会が開催されるし、また各科および専修学校
高等学校の同窓会の連合体である学園同窓会の設立が
近づいているのでその記事を載せたいので発刊を延
期する。

3 運営委員の懇親会開催の件

4 10月18日第8回運営委員会を開く。

出席者17名

第8回運営委員会

10月18日

1 学園同窓会設立準備委員会報告（小高氏より）

過去に何度か各科同窓会の連合体である学園同窓会
を設立すべき会合が開かれたが、ようやく発足の段階
にきた。会則について検討し、一部疑問点を訂正し
てもらふ事で承認なる。

2 本同窓会が学園同窓会に対し連合体を積極的に作り
あげるといふ態度で行くべきであると云う事で運営委
員全員の賛成をうる。

3 工手学校出身者代表との会合報告

工手学校出身者の松本、五十嵐両氏と小高、金田、
杉野、宮崎氏が会合し先輩は建築科同窓会設立に非常
に関心を持っており是非仲間に入れて欲しい。同窓会
側も運営委員会で検討し期待にそうよう努力する。

出席者16名

第9回運営委員会

11月1日

1 11月5日 第2回総会の件、総会をいかに成功させ
るか討議。

2 総会通知の件

総会の案内状その他郵便物の発送が印刷物等の関係
で遅れた。なんとしても運営委員の苦労を生かすため
総会を成功させるよう努力する。

3 総会プログラムの件

各報告の担当者決定、各自受持の範囲を出席者の質
問に答えられるようにしておく。

4 総会後の懇親会開催の件

総会後ビールパーティーを開催し会員の親睦を計
る。

出席者15名

第10回運営委員会

昭和34年1月10日

第2回総会后、初めての運営委員会であり2年度目
の方針を討議された。

1 特別会員加入の件

1) 工手学校・短大卒業者の扱いを正会員にしたらど
うか。

2) 教職員を特別会員に入れる。会費をどうするか。

2 同窓会組織充実の件、分担決定

- 1) 事務局 金田、倉持
2) 名簿作成部 木村、大森、高岡、清水
3) 会費徴収部 浅見、田辺
4) 会誌発行部 宮崎、小高、金田、小儀、倉内、
山村、愛川、後藤、本田

- 5) 会計 杉野
6) 会計監査 宮島、宮沢
7) 総会開催部 塩谷、黒沢
8) 厚生部 西野、佐川、矢下、中村

3 学園同窓会理事会報告

4 運営委員親睦会 2月14日午後6時より

出席者15名

2月7日

第11回運営委員会

- 1 前回運営委員会報告
2 会誌発刊の件
3 新卒業生入会の件、設立のPR
4 特別会員入会について
5 分科会年次計画発表
6 その他

以上 金田昭治記

工学院大学建築学科同窓会

初年度会計報告（昭和42年9月30日現在）

（収 入）

○準会員会費	40年度入学生	274,000
	41年度入学生	289,000
	42年度入学生	1,659,000
○正会員会費		147,940
○名簿代金		30,500
○雑収入	利息（下期）	4,259
	（上期）	16,147

2,420,846

（支 出）

○印刷費	204,500
○通信費	48,130
○名簿発行費	383,715
○雑費	52,990

689,335

今年度残 1,731,511

前年度繰越金 933,455

計 2,664,966

2年度事業計画による予算（42、10～43、9）

○同窓会々誌発行	200,000
○各部会充実費	100,000
○準会員に対する経費	100,000
○厚生部経費	100,000
○本部経費	100,000
○予備費	100,000

計 700,000

監査 宮沢 孝夫

工学院大学建築学科同窓会会則

前 文

私達建築学科同窓生は、伝統ある母校を愛し、交友を維持発展させる為、互に親睦を図り、相互扶助の精神を尊び広く建築の諸問題を研究する事を目的とし、健全な人間関係の確立と意志伝達の機関として、ここに規約を定めて、工学院大学建築学科同窓会を結成する。

第1章 総 則

- 第1条 本会は工学院大学建築学科同窓会という。
- 第2条 本会は本部を工学院大学建築学科事務室とし、また必要に応じて支部を各地に置く事がある。
- 第3条 会則の変更は総会の承認を得なければならない。

第2章 事 業

- 第4条 本会は前文の目的を達する為に次の事業を行う。
1. 会員相互の連絡
 - 1) 会報および会員名簿の刊行
 2. 会員相互の親睦
 - 1) 会員相互の親睦会開催
 - 2) 海の家、山の家、開催
 3. 会員に対しての援助
 - 1) 正会員、学生会員に対しての育英資金の貸与
 - 2) 災害に対する資金カンパ
 - 3) 学内コンペに対する助成
 4. 講演会、研究会、開催
 5. 他団体との交流
 - 1) 校友会、他学科同窓会、他校同窓会
 6. 本会の目的を達する為にその他必要と認めた事業

第3章 会 員

- 第5条 会員は正会員、学生会員、特別会員とする。
- 第6条 正会員は工学院大学建築学科（建築コース・設備コース）、建築学専攻科及び大学院建築学専攻の卒業生とする。
- 第7条 学生会員は工学院大学建築学科（建築コース・設備コース）、建築学専攻科および大学院建築学専攻（本学卒業生を除く）に在学する学生とする。
- 第8条 特別会員は本会目的に賛同し、運営委員会の認めた個人および団体とする。

第4章 役 員

- 第9条 本会に次の役員を置く。
- 会 長 1名

副 会 長 1名
会 計 1名
会計監査 2名

運営委員（正会員・学生会員より）若干名

第10条 役員は次の方法で選出する。

- 1) 会長は総会での直接選挙で選出する。但し当分の間、運営委員会で選出し総会の承認を得る。
- 2) 副会長・会計は運営委員より運営委員会の同意を得て、会長が任命する。
- 3) 運営委員は正会員より卒業年度別に選出する。
- 4) 会計監査は正会員より運営委員会で選出し総会の承認を得る。
- 5) 学生運営委員は本会が認めた団体から各2名を運営委員とする。
- 6) 本会の必要に応じて相談役を置く事が出来る。
- 7) 相談役は運営委員会にはかって会長が推選し、会長の諮問に応じて各種の会議に出席し意見を述べる事が出来る。
- 8) 本会役員は無報酬とする。

第11条 役員の任期は2カ年とし、学生役員は1カ年とする。但し再任は妨げない。

- 第12条
- 1) 会長は本会を代表して会務を総理する。
 - 2) 副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はその職務を代行する。
 - 3) 会長は運営委員会の長を兼務する。
 - 4) 運営委員会は会長が招集し、毎月1回開催する。また、運営委員の1/3以上の要求のあった時は招集しなければならない。
 - 5) 運営委員会は、会長、副会長、会計、運営委員で構成する。
 - 6) 運営委員会は予算および企画、重要事項を審議する。
 - 7) 運営委員会は各分科会を設けて、本会に定められた事業を行う。

第5章 総 会

- 第13条 総会は本会最高の議決機関で正会員で構成し議長は正会員の中から選出する。
- 第14条 総会役員は議決に加わらない。
- 第15条 学生会員及特別会員は議決に加わらない。但し傍聴は拒まない。
- 第16条 総会は通常総会、臨時総会とする。通常総会は毎年10月に之を開く。
- 第17条 臨時総会は次の場合会長が招集する。
- 1) 運営委員会が必要と認めた時

2) 100人以上の正会員からの会議の目的事項を示し、その開催を請求した時

第18条 総会の目的、期日及場所は会期2週間前に之を全正会員に通知しなければならない。

第19条 総会の議題は予め通知した事以外に亘る事は出来ない。

第20条 会員の議案は提出者側に総会に出席して説明する事を原則とする。

第21条 会員が出議案を提出の場合は4週間前に運営委員会に提出しなければならない。

第22条 次の事項は通常総会において承認を受けなければならない。

- 1) 前年度事業報告
- 2) 前年度収支決算
- 3) 本年度事業計画
- 4) 本年度収支予算

第23条 総会の決議は出席正会員の過半数の同意を必要とする。

第24条 総会の決議で賛否同数の場合は議長採決とする。

第25条 正会員は書面を以って総会における議決権を総会に委任する事が出来る。

第6章 会 計

第26条 正会員、学生会員は入会金として金500円を納付する。会費は次の三種とする。

正会員	1カ年	500円
学生会員	1カ年	300円
終身会員	前納	5,000円

但し正会員および学生会員で会計年度の中間に入会したものは月割計算とする。

第27条 会計は、通常会計および特別会計に分ける。

- 1) 通常会計は会費およびその他の収支とする。
- 2) 特別会計は入会金並びに基本金としての指定寄付金とする。但し基本金の利子は通常会計に編成することが出来る。

第28条 特別会計は総会の決議を経ずして使用する事は出来ない。

第29条 基本金保管方法は次の何れかにしなければならない。

- 1) 国庫債券
- 2) 郵便貯金
- 3) 銀行預金

第30条 会計年度は10月1日に始まり翌年9月30日に終

る。

第31条 毎年度予算および決算は会報により報告する。

第7章 支 部

第32条 支部を設置しようとする時は支部会則を定めて運営し、本部に運営委員を送る事が出来る。

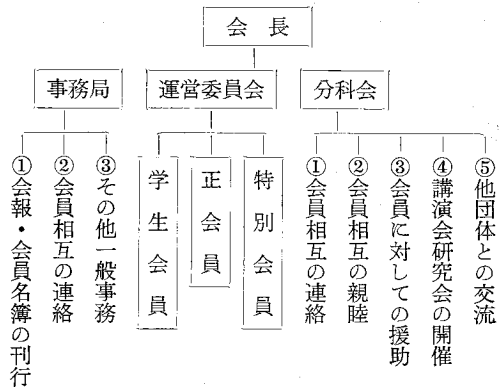
第8章 事務局

第33条 本会運営の円滑を期す為に事務局を置く。

- 1) 事務局長は運営委員より選出する。
- 2) 事務局は局長1名事務員若干名で構成する。
- 3) 本会事業を行うため事務一般を掌る。
- 4) 事務局長は運営委員会にそのつど本会事業一般を報告する。
- 5) 必要に応じて事務局細則を定め運営委員会の承認を得る。

第9章 付 則

第34条 本会則は昭和42年1月22日より発効する。



学園同窓会関係記事は、学園同窓会発行の会報に掲載されます。

工学院大学学園同窓会会則

第1章 総 則

第1条 本会は工学院大学学園同窓会と称する。

第2条 本会の事務所は学校法人工学院大学内に置く。

第3条 本会は工学院大学学園同窓会の連合であって相互の連絡と親睦を図り、相互理解を深めかつ工学院大学学園の発展に寄与しようとするものである。

第2章 会 員

第4条 本会は次の団体会員からなる。

1. 工学院大学専修学校同窓会
2. " 高等学校同窓会
3. " 機械工学同窓会
4. " 応 化 会
5. " 電気同窓会
6. " 建築学科同窓会

第3章 役員・代議員および名誉会員・相談役

第5条 役 員 本会に次の役員を置く。

- (1) 会長1名、副会長2名、理事40名以内（会長1名副会長2名、常任理事7名（副会長を含む）以内を含む）、監査2名。

- (2) 代 議 員 代議員は各団体会員の推薦によるものとし、次のように構成される。

1. 工学院大学専修学校同窓会 15名以内
2. " 高等学校同窓会 "
3. " 機械工学同窓会 "
4. " 応 化 会 "
5. " 電気同窓会 "
6. " 建築学科同窓会 "

- (3) 名誉会員 名誉会員は本会に特に功労のあったもので、理事会で推薦し代議員会で承認されたもの。

- (4) 相 談 役 相談役は本会に特別の関係があるもので理事会で推薦し、代議員会で承認されたもの。

相談役は会長の諮問に応じ、重要事項について、会に意見を述べることができる。

第6条 役員および代議員の責務は次の通りとする。

- (1) 会長は本会を代表し、会務を統理する。
- (2) 副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは、その職務を代理する。
- (3) 常任理事は本会の運営の方針を立案し、会務を分担して処理する。

- (4) 理事は本会の運営方針を定め、これを実行に移す。

- (5) 代議員は予算、決算その他の重要な事項に関して会務に参与する。

- (6) 監査は会計を監査し、代議員会においてその結果を報告する。

第7条 役員の選出は次の通りとする。

- (1) 会長は理事の互選により定める。
- (2) 副会長は会長が委嘱する。
- (3) 常任理事は理事のうち各団体会員から1名ずつ選出されるものとする。
- (4) 理事は代議員中から互選するものとし、これに学校法人工学院大学理事長の推薦による関係各学校の教員5名を加える。
- (5) 監査は代議員会において、代議員の中から選出する。

第8条 本会の役員の任期は2カ年とし、重任は妨げない。

第4章 理事会および代議員会

第9条 常任理事会および理事会は必要に応じてこれを開き、事業遂行について協議し、会務を処理する。議長は会長がつとめる。

第10条 代議員会は最高の議決機関であり、毎年1回以上開き、予算、決算、会則の変更など重要な事項を審議決定する。代議員会は委任状を含む定数の2分の1によって成立し、その議決には出席代議員の過半数の同意を必要とする。議長は、その代議員会において選出される。

第11条 理事会および代議員会は会長がこれを招集する。また、代議員の3分の2の要求があるときは会長は代議員会を開かなければならない。

第5章 支 部

第12条 便宜の各地区に支部を設けることができる。

第6章 会 計

第13条 本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第14条 本会の経費は団体会員からの会費、その他によって、支弁する。

第15条 団体会員の会費は次の通りとする。
(略)

第16条 本会の予算および決算は毎年これを代議員会に報告して承認を求めなければならない。

付 則

- (1) 本会則は昭和42年11月12日から実施する。

編集後記

途中色々な問題にぶつかった。それは単に建築というジャンルだけで前進しえないからである。しかし限られた時間内での活動、安く上げるための写真やカットづくり……今夜も時計は11時を回っている。所詮未熟ではあるがこの編集もやっと終りに近づいてきた我々のこの機関紙が同窓会発展のためいずれかの契機となることを期待します。

—H生—

今回経験のない私が、編集に参加して感じた事は、自分の仕事以外にサイドワークとしてやるには大変なことなので、次回より、会員の中から多数の参加を願いたい。

—Y生—

建物の設計は敷地全体と、与えられた条件を頭において設計しなければいけない事を充分知っている者と、現場で、段取八分と鍛えられて来ている連中とが集まって作ったはずなんです、ウォーミングアップせずに水に飛び込んだものですから、足の筋肉が硬くならなければ良いと心配しております。ただ、今夜も仕事がたまって

残業だから出られないという同志のいる事も附記させていただきます。

—O生—

どうにかこうにか我々の会話が誕生したことに意義があるはずだ。これからこの児がどう育って行くかは、我々会員がどう育って行くかにかかっている。世界を動かす“大もの”などにならなくとも、意欲的で革新的な児に育てたい。

—K生—

山下先生の所へ、割付けの件で伺う。「何んだ、この原稿の事か、あまり古い話で忘れちゃったよ。」会長現る。「小高。今頃何んだい。」「色々都合がありまして」「お前が悪いんだぞ。」「どうも……。」「小生脇にいて腋の下から冷汗……。小高会長の“ペースメーカーは誰かがならなければならないんだ”のことはによって、この会報は出来たようなもの。この欄を借り、御礼申し上げます。」「謝謝……。」「

—M生—

編集兼発行人	宮崎 勝弘
編集発行	工学院大学建築学科同窓会
印刷所	株式会社 富士工芸

新しい建築のデザインと

よりよい明日の街造り

宮沢建築設計事務所

東京都豊島区西单鴨 2-2084
(国電大塚駅南口天祖神社裏都電通り)
TEL 971-2779・981-0271

